

長野県千曲市

屋代遺跡群 地之目遺跡2
古道遺跡2

- 市道屋代新田線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2012

千曲市教育委員会

長野県千曲市

屋代遺跡群

地之目遺跡2
古道遺跡2

- 市道屋代新田線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2012

千曲市教育委員会



5号鞋群 出土遺物写真



5号鞋群 出土遺物写真



8号畦畔 遗物出土状况写真



8号畦畔 出土遗物写真



千曲市の位置

例　　言

- 本書は、市道屋代新田線道路改良事業に伴い平成20年度から23年度にかけて実施した、屋代遺跡群地目及び屋代遺跡群古道遺跡の発掘調査報告書である。
- 調査は、千曲市教育委員会生涯学習文化課が主体となり、文化財係が担当した。
- 本書の執筆・編集は寺島が行った。
- 本書掲載の遺構及び遺物の縮尺は下記のとおりである。

遺構図　　堅穴住居跡・掘立柱建物跡 = 1:60　　遺物出土状況等詳細図 = 1:20・1:40

土層断面図 = 1:40

遺物図　　土器・陶器 = 1:4　　土製品 = 1:2

- 本書掲載の堅穴住居遺構図において、床面での焼土及び炭化物の散布範囲については、網掛けにより表現した。

- 本文中の遺物実測図の表現方法は下記のとおりである。

土師器　　断面 = □　　黒色処理 = ■■■■■

須恵器　　断面 = ■■■■■

灰釉陶器　　断面 = □□□

綠釉陶器　　断面 = □□□■■

- 本文中の図版の座標値及び方位は、平面直角座標系第Ⅳ系で示している。

- 調査によって出土した遺物のほか、実測図及び写真等発掘調査に関するすべての資料は、千曲市教育委員会で保管している。

目 次

図版

- 5号畦畔 遺物出土状況写真
- 5号畦畔 出土遺物写真
- 8号畦畔 遺物出土状況写真
- 8号畦畔 出土遺物写真

例言

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 各工区の調査概要	3
第3節 調査日誌	5
第2章 遺跡の環境	8
第3章 遺構と遺物	10
第1節 調査の方法	10
第2節 基本層序	11
第3節 水田跡	18
第4節 畠跡（畝状遺構）	21
第5節 堅穴住居跡	22
第6節 捜立柱建物跡	29
第7節 土坑・溝跡・その他の遺構	30
第8節 遺構外出土遺物	32
第4章 まとめ	40
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

しなの鉄道屋代高校前駅は、屋代駅-篠ノ井駅間にしなの鉄道線2番目の開業駅として、平成13年3月22日開業した。

駅の建設地は、もともと水田や畠地であったことから、周辺幹線道路から駅へのアクセスは幅4mほどの市道を利用する形となっていた。そこで、駅利用者の利便性向上を図るために、駅前周辺整備と併せて市道屋代新田線の道路改良が計画された。

まず、駅前の現道拡幅工事から着手され、平成13年12月6日から14日にかけて長野県屋代高等学校グラウンド北側の約100mの発掘調査が実施された。この調査は、現道の拡幅にあたる箇所であったことから調査区幅が3mほどしか確保できなく、深部への掘削は一部しかできなかったが、地表下2.5mから平安時代の水田跡が確認され、畦畔が2条検出されている。

平成17年1月21日に千曲市建設部建設課より、平成13年度に実施した工事箇所から南側への工事計画概要が示された。今回の工事箇所は屋代高等学校グラウンドの西側から国道403号へ接続する箇所までの総延長約510mにおいて、歩道を含めた道路幅は10.5m（最大14.25m）で、事業面積は約5,400m²を測るものである。この時点では、平成17年度に用地買収を終えた箇所より発掘調査を実施し、平成18年度から工事に着手する計画であったが、平成17年8月25日に実施した保護協議の際に、計画に遅れが生じていることが示され、平成17年度中のみならず、平成18年度においても発掘調査に着手することは難しい状況となった。さらに、平成18年10月11日に実施した協議において、現在の進捗状況からは平成19年度中での工事着手も困難になったことが建設課より伝えられ、発掘調査は当初計画から大幅にずれ込むこととなった。

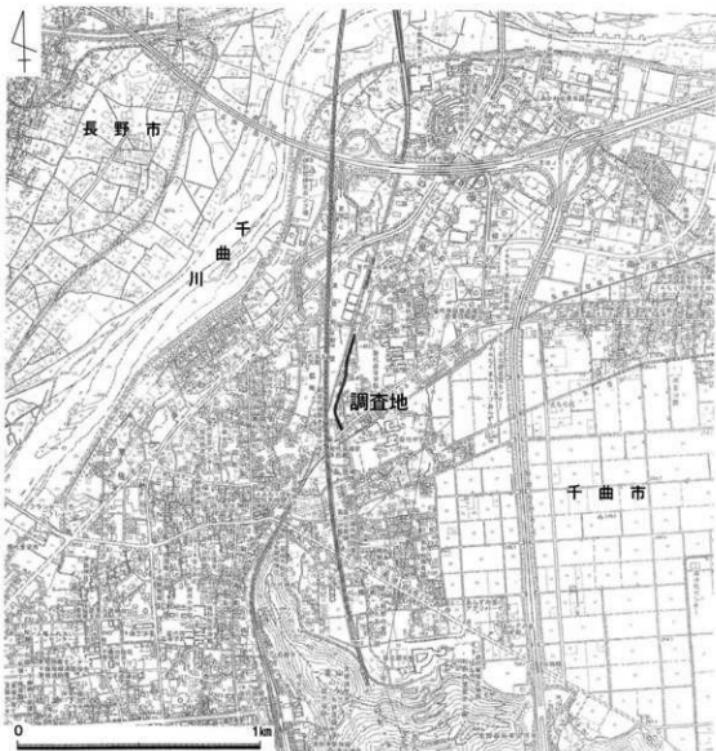
平成20年度に入り、用地交渉が進展を見せたことから年度内での発掘調査着手が可能となり、平成20年12月2日、文化財保護法第94条に基づく通知書が提出された。これを受け、同年12月10日に保護協議を実施し、平成21年2月下旬から調査に着手することとした。

発掘調査は、事業規模や用地買収の進捗状況から複数年度におよぶものとなった。結果的に工事は4つの工区に分割され、各工区の事業発注をもって発掘調査実施となるため、調査も4カ年に跨ることとなった。

1 調査遺跡名	屋代遺跡群 地之目遺跡（千曲市遺跡台帳No31-2 調査記号 GNM 2～4）
	屋代遺跡群 古道遺跡（千曲市遺跡台帳No31-8 調査記号 KOM 2）
2 所 在 地	千曲市大字屋代1008番地6 ほか
3 事業主体者	千曲市長 近藤清一郎（千曲市建設部建設課）
4 調査原因	市道屋代新田線道路改良
5 調査面積	3,140m ² （一次調査面2,210m ² 二次調査面930m ² ）
6 調査期間	発掘調査 平成21年2月25日～平成23年5月12日

第1工区調査 平成21年2月25日～平成21年5月18日

		第2工区調査 平成22年3月8日～平成22年4月14日
		第3工区調査 平成22年11月24日～平成23年1月14日
		第4工区調査 平成23年3月14日～平成23年5月12日
		整理調査 平成21年4月1日～平成24年3月30日
7 調査費用	11,424,703円	
	平成20年度	4,245,640円
	平成21年度	2,031,192円
	平成22年度	4,180,116円
	平成23年度	967,755円
8 調査体制	千曲市教育委員会	
	教育長	安西嗣宜（～平成23年12月3日）
		吉川弘義（平成23年12月5日～）
	教育部長	塙田保隆（平成20年度）
		高松雄一（平成21～22年度）
		小池洋一（平成23年度）
	文化課長	小林修二（平成20年度）
	総務課長	小池洋一（平成21年度）
		小泉義和（平成22年度）
		武田清志（平成23年度）
	文化財係長	矢島宏雄
	文化財係	小野紀男（平成20年度）
		寺島孝典（調査担当）
		荒井紀彦（平成21年度）
		翠川泰弘（平成22年度～）
		久保紀明（平成23年度）
調査指導	並沢 浩	千曲市文化財保護審議会委員
	保柳康一	信州大学理学部教授
	原 明芳	長野県立歴史館学芸部 考古資料課長
調査参加者	発掘調査作業	青木好喜・小林直文・小宮山重信・佐藤絃一・高野貞子 高野幸男・竹之内常秋・中村文恵・野中みどり・間嶋今朝雄 米沢須美子
	整理調査作業	大庭美代子・田中富子・米沢須美子
9 種別・時期	水田跡・畠跡・集落跡	奈良時代～平安時代
10 検出遺構	地之目遺跡	水田跡（水田面1面・畦畔8条）・畠跡（畠面1面・畝状遺構） 堅穴住居跡14棟・掘立柱建物跡1棟・溝跡10基・土坑1基 堅穴遺構2基・台状遺構1基
	古道遺跡	畠跡（畠面1面・畝状遺構）・堅穴住居跡2棟
11 出土遺物	土器・灰釉陶器・綠釉陶器・土製品等	遺物整理コンテナ19箱



第1図 調査地位置図（1：20,000）

第2節 各工区の調査概要

【第1工区】 当該事業区間で最も北に位置する工区で、平成13年度調査区の西側にあたり、保護対象面積1,400m²の内950m²について発掘調査を実施した。

この区間は、しなの鉄道線に隣接した箇所となるため、平成21年2月12日、しなの鉄道㈱へ近接協議書を提出し、重機等の運用での注意及び防護フェンスの設置など、発掘調査実施に際して安全管理に十分な配慮をおこなうことで調査に理解を得た。

第1工区は、①区～④区と⑥区に分割された範囲で、平成21年2月25日に②区から発掘調査を開始した。④区は現道の拡幅箇所となるため調査区幅が5m未満と狭く、深部まで掘削ができず調査区を分割したことから、北側を④-1区、南側を④-2区と区分して調査を実施した。

なお、⑥区については、現道がカーブしている箇所の拡幅部分であり、調査幅が最大でも3m弱しか確保できないことから、全体を掘削しての発掘調査は困難と判断し、工事立会調査を実施した。

調査は平成21年5月18日に終了した。実動53日間である。

【第2工区】 残りの区間の発掘調査について、平成22年1月25日に保護協議を実施した。まず、家屋の移転・撤去が完了している国道403号接続部分（⑨区～⑪区）の発掘調査を先行して実施し、残区間（⑤・⑦・⑧区）の発掘調査については用地交渉の進展具合を見ながら着手することとなる。

市道4060号と国道403号を境に調査区を分割し、まず⑩区の調査を平成22年3月8日に開始した。

⑪区は屋代遺跡群郷津遺跡、⑩区は屋代遺跡群古道遺跡の範囲内にあたる部分で、市道4060号より北からが屋代遺跡群地目遺跡の範囲内となる。

事業面積は800m²で、交差点付近や現道部分など調査不能箇所450m²を除いた350m²を保護対象としたが、隣接するアパートへの出入口確保や、下水道管の埋設箇所など掘削できない場所が存在したため、最終的な調査面積は160m²となった。なお、⑪区は交差点部分の道路改良であり、十分な調査区幅も確保できなかったことから、発掘調査は不可能と判断し、工事立会による調査を実施した。

残区間については、その後の交渉が進展せず発掘調査を継続して実施することが不可能となったことから、平成22年4月14日、⑨区及び⑩区の調査終了で一旦中断となった。実動21日間である。

【第3工区】 平成22年4月30日に保護協議を実施し、工区内にある樹木の伐採が順調に行けば5月下旬から発掘調査が開始できるものとして準備を進めたが、予定どおりには進展せず、結果的に発掘調査着手となったのは同年11月24日である。

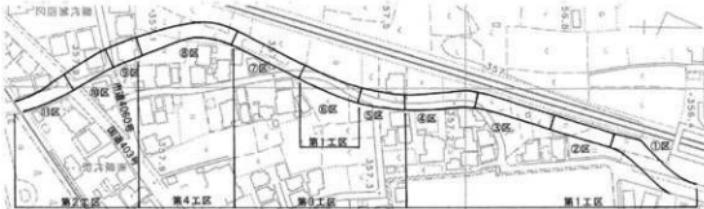
工区内が現道により分断されているため、北側を⑤区、南側を⑦区として区分し、⑤区の調査から先行した。⑤区は現道の拡幅部分にあたり、幅6mほどの調査範囲となる。

保護対象面積700m²の内500m²について発掘調査を実施し、平成23年1月14日に調査を終了した。実動24日間である。

【第4工区】 第2工区と第3工区との間の工区で、当該事業最後の工事工区となる。

平成23年2月4日に保護協議を実施し、他事業の発掘調査との調整をしながら、3月中旬に最後となる⑥区の調査に着手することとなった。

発掘調査は平成23年3月14日から開始し、保護対象面積960m²の内600m²の調査をおこない、5月12日に終了した。実動30日間である。



第2図 工事工区と調査区割

当該事業に係る発掘調査にかかった日数は合計128日間を数え、二次調査面積930m²を加えた総調査面積は3,140m²におよぶものとなった。

整理調査は、出土遺物の洗浄から接合までの作業を各年度発掘調査終了後に実施し、平成23年度に調査報告書作成に向けた遺物実測、図面整理等をおこない、平成24年3月30日の調査報告書刊行をもって、当該事業に係るすべての業務を終了した。

第3節 調査日誌

平成21年

- 2月25日（水）③区表土掘削（～27日）。
- 2月26日（木）プレハブ・トイレ・発掘機材搬入。
- 3月2日（月）検出作業開始。
- 3月3日（火）水田面検出。1号畦畔検出。
- 3月5日（木）水田面精査。1号畦畔以南写真撮影。
- 3月10日（火）1号畦畔以北写真。2号畦畔写真撮影。
- 3月11日（水）水田面下層レンチ調査（～18日）。
- 3月17日（火）基準点測量。
- 3月19日（木）1号溝跡調査。②区調査終了。
- 3月24日（火）②区埋め戻し（～27日）。
- 3月25日（水）①区表土掘削。
- 3月27日（金）検出作業開始。
- 4月2日（木）3号・4号畦畔検出。
- 4月3日（金）全体写真撮影。
- 4月6日（月）水田面下層レンチ調査。2号溝跡検出。
- 4月7日（火）2号溝跡調査。①区調査終了。
- 4月8日（水）①区埋め戻し（～9日）。
- 4月9日（木）③区表土掘削（～14日）。
- 4月10日（金）検出作業。5号・6号畦畔検出。
- 4月15日（水）5号畦畔より灰釉陶器皿・碗・壺出土。
- 4月16日（木）5号畦畔遺物出土状況写真撮影。平面図。
- 4月17日（金）記者発表 10社。現場説明会準備。
長野県立歴史館原明芳課長調査指導。
- 4月18日（土）現場説明会 110名。
- 4月20日（月）8号畦畔調査。突帯付短頸壺出土状況写真。
- 4月21日（火）突帯付短頸壺周辺より、灰釉陶器皿・碗・壺、須恵器四耳壺など出土。
- 4月22日（水）千曲市文化財保護審議委員会兼沢浩先生調査指導。履代高等学校生徒150名現場見学。
- 4月23日（木）③区全体写真撮影。8号畦畔出土遺物平面図、写真。8号畦畔立ち割り。
- 4月24日（金）5号・6号畦畔立ち割り。下層で堅穴住居跡検出。
- 4月27日（月）1号住居跡調査。
- 4月28日（火）5号・6号畦畔断面図。1号住居跡調査。



調査着手前 (①区)



作業風景 (②区)



作業風景 (①区)



出土遺物検出作業 (③区)

- 4月29日（祝）信州大学理学部保柳康一教授調査指導。
- 4月30日（木）①号住居跡調査、写真。③区調査終了。
- ③区埋め戻し（～5月2日）。
- 5月7日（木）④区表土掘削（～11日）。
- 5月8日（金）検出作業。9号・10号畦畔検出、調査。
- 5月12日（火）9号畦畔上に鉄状の凹凸。島跡となる。5号畦畔が西側へ弧状に湾曲。
- 5月13日（水）全体写真撮影。9号畦畔トレンチ調査。
- 5月14日（木）全体写真撮影。
- 5月18日（月）9号畦畔断面図。機材撤収。本日をもって第1工区の調査終了。



作業風景（④-2区）

平成22年

- 3月8日（月）⑨区表土掘削。発掘機材等搬入。
- 3月9日（火）検出作業。北半分はコンクリート建物により破壊されている。
- 3月10日（水）除雪作業。鉄状遺構検出、調査。
- 3月11日（木）全体写真。平面図、断面図作成。
- 3月12日（金）基準点測量。トレンチ調査。下層より遺物が多く出土する。
- 3月15日（月）トレンチ拭張。2号・3号住居跡検出、調査。
- 3月16日（火）2号・3号住居跡写真。⑨区調査終了。
- 3月18日（木）⑨区表土掘削。全体を掘削できないため、南北に分けて調査。北側検出作業。
- 3月24日（水）一次調査面写真。
- 3月26日（金）下層トレンチ調査で堅穴住居跡を検出。二次調査面を設定。



表土掘削（⑨区）



遺構検出作業（⑨区）

- 3月29日（月）遺構検出作業。煙道が5箇所検出され、住居跡の重複が著しい。
- 3月30日（火）4～6号住居跡調査。
- 3月31日（水）4号・6号住居跡写真。7号住居跡調査。
- 4月1日（木）8号住居跡調査。北側調査終了。
- 4月5日（月）⑨区南側表土掘削。
- 4月6日（火）一次調査面検出作業。写真。
- 4月7日（水）二次調査面遺構検出作業。4号・5号・9号・10号・11号住居跡調査。



堅穴住居跡調査（⑨区）

- 4月9日（金）9号・10号住居跡調査、写真。発掘機材撤収。
- 本日をもって第2工区の調査終了。

- 11月24日（水）⑤区表土掘削。検出作業（～26日）。
- 12月1日（水）軌状遺構検出。
- 12月2日（木）全体写真撮影。
- 12月3日（金）下層トレンチ調査。堅穴住居跡検出。
- 12月8日（水）二次調査面掘削。遺構検出作業。
- 12月9日（木）12号・13号住居跡調査。13号住居跡写真。
- 12月10日（金）12号・14号住居跡調査。12号住居跡写真。
- 12月13日（月）15号住居跡・1号土坑調査。基準点測量。
- 12月14日（火）14～16号住居跡調査。
- 12月15日（水）14～16号住居跡調査。写真撮影。
- 12月16日（木）全体写真撮影。⑤区調査終了。
- 12月20日（月）⑦区表土掘削。検出作業（～1月11日）。
- 12月27日（月）水田面精査、写真撮影。

平成23年

- 1月7日（金）12号畦畔写真撮影。軌状遺構調査。
- 1月11日（火）11号畦畔・水田面精査。写真撮影。
- 1月13日（木）基準点測量。12号畦畔下層トレンチ調査。
- 1月14日（金）13号畦畔写真撮影。機材搬収。本日をもって第3工区の調査終了。
- 3月14日（月）⑧区表土掘削。南北に分けて調査。
北側検出作業（～17日）。
- 3月18日（金）洪水砂除去後の全体写真撮影。
- 3月23日（水）下層トレンチ調査。
- 3月24日（木）基準点測量。
- 3月28日（月）二次調査面への掘削。遺構検出作業。
- 3月29日（火）1号・2号堅穴遺構調査。
- 3月31日（木）1号堅穴遺構写真。1号掘立柱建物跡検出。
調査。
- 4月4日（月）2号堅穴遺構写真。二次調査面下層トレンチ
調査。⑧区北調査終了。
- 4月11日（月）⑧区南表土掘削。検出作業（～14日）。
- 4月15日（金）全体写真撮影。
- 4月22日（金）下層トレンチ調査。
- 5月6日（金）二次調査面遺構検出作業。
- 5月12日（木）土断面図作成。⑧区調査終了。



表土掘削（⑤区）



水田面検出作業（⑦区）



遺構検出作業（⑧区北）



水田面検出作業（⑧区南）

本日をもって第4工区の調査終了し、当該事
業に係るすべての発掘調査を終了する。

第2章 遺跡の環境

屋代遺跡群は千曲市の北部、千曲川が流れを北東へ大きく屈曲させる右岸に形成された自然堤防上に立地しており、繩文時代から中世に至る複合遺跡として周知されている。

地之目遺跡及び古道遺跡は屋代遺跡群の西端にあたり、北緯36度32分、東経138度07分、海拔357m付近に位置する。遺跡の西側は千曲川の流路となるため地形変動が著しかったとみられ、過去に実施された屋代遺跡群内の調査においても、旧河道として確認されている場所がいくつか存在する。

両遺跡とも集落跡が検出される遺跡として周知されており、北陸新幹線建設に伴う調査などで弥生時代から平安時代の集落が調査されたが、地之目遺跡では後述する砂質土に覆われた平安時代の埋没水田跡が一部で検出され、さらに、平成13年度に実施した市道屋代新田線道路改良の際の発掘調査においても同様に、厚い砂質土に被覆された平安時代水田跡が検出されるに至り、集落跡のみならず、水田跡も検出される遺跡として知られるようになった。

屋代遺跡群の南側一帯は、千曲川の氾濫により形成された後背湿地として展開し、通称“屋代田んぼ”と呼ばれる水田地帯が広がっている。ここは更埴条里水田址として平安時代の埋没水田跡が分布する地域であり、これまで実施された調査から、約109m四方に区画された内部を、さらに細かく区分けした畦畔が整然と並ぶ条里制水田跡が検出されている。

条里制水田の研究は、条里制度が布かれた当時の区割りがそのまま現代の水田の区割りに踏襲されているものと想定して、地表で観察できる畦畔の位置を基に進められていた。しかしながら、圃場整備事業に伴い昭和36年から40年にかけて実施された国内初ともいえる埋没条里水田跡の学術調査によって、地表の畦畔と調査により検出された畦畔とは必ずしも一致していないことが明らかとなり、以降の条里制水田跡研究に一石を投じる調査となった。また、多くの調査地点で検出される水田跡が砂質土に被覆されている状態であることが解り、当該地区周辺での発掘調査を実施するにあたっては、この砂質土の有無を一つの目安とことができている。

更埴条里水田址や屋代遺跡群内的一部で検出されるこの砂質土は、上部が耕作等により削平され不鮮明な部分もあるが、概ね10cm程度から、深いところでは2m以上厚みをもって堆積し、その直下に水田跡や畠跡のはか、竪穴住居跡なども検出される。

この砂質土については、仁和4年に起った千曲川大洪水によりたらされたものと考えられており、日本三代実録や類聚三大格、扶桑略記、日本略記などに千曲川大洪水と、起因となった大地震に関する記述がある。これによれば、仁和3年7月30日（887年8月22日）に発生した、東南海域を震源とする大地震の影響により八ヶ岳（天狗岳）が山体崩壊し、崩落した土砂により千曲川が堰き止められて天然のダム湖が形成され、翌仁和4年5月8日（888年6月20日）の天然ダム湖決壊により大洪水が起ったとしている。

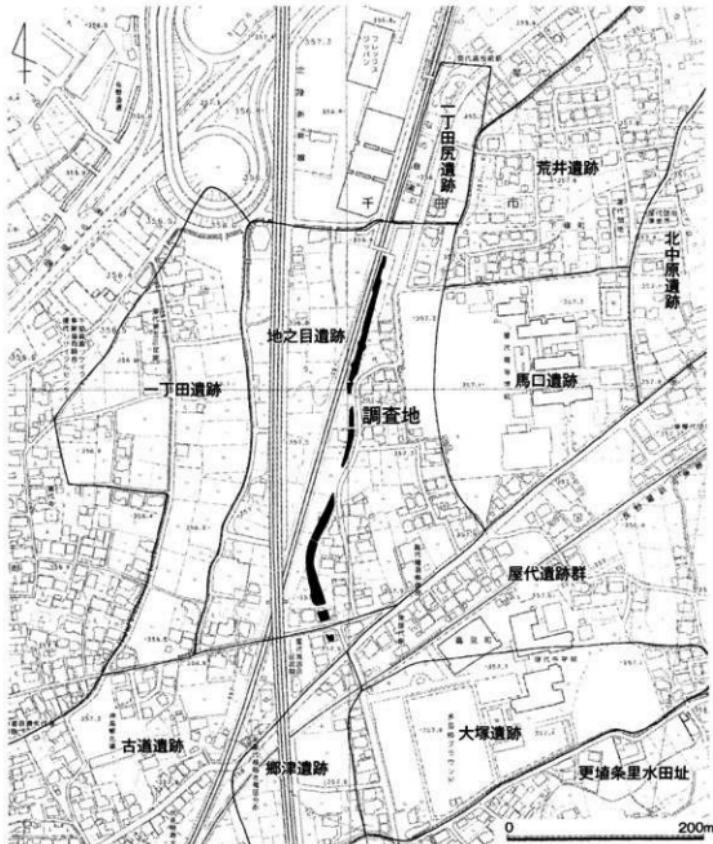
八ヶ岳崩壊の際に埋没した樹木の年輪年代測定調査で仁和3（887）年という測定結果が得られており、洪水砂内や水田面などから出土する遺物には9世紀代の遺物が含まれている。さらに、この砂質土を掘り込んでいる最も古い遺構が10世紀前半をあてることからも、仁和4年の千曲川大洪水によりたらされた砂質土であることが裏付けられていると言えよう。

屋代遺跡群や更埴条里水田址のはか、千曲市内では力石条里遺跡群でこの洪水砂に被覆された水田

跡が検出されており、長野市では石川条里遺跡や篠ノ井遺跡群、川田条里遺跡、埴科郡坂城町では上五明条里水田址や青木下遺跡、佐久市では跡部儘田遺跡や砂原遺跡など、千曲川流域に存在する各遺跡でも同様の事象の確認が報告されている。

引用・参考文献

- 上山田町教育委員会 1990 「力石条里遺構」
川崎 保 2000 「[仁和の洪水]砂層と大月川岩屑なだれ」「長野県埋蔵文化財センター紀要8」
坂城町教育委員会 1996 「上五明条里水田址」
長野県教育委員会編 1968 「地下に発見された更埴市条里遺構の研究」
長野県埋蔵文化財センター 2002 「上五明条里水田址」



第3図 周辺の遺跡分布（1：5,000）

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の方法

1 調査区分と調査順序

調査工程の関係から全調査区を便宜的に11区分して調査を実施した（第2図）。

これは、工事工程が複数年度におよんだことにも関係するが、調査により発生した掘削土を調査区域外へ搬出せず、事業計画路線内などへ仮置きしなければならなかつたため、一貫した調査ができないことに起因する。

調査区分は、設計図面を基に現地において任意の区割りをおこない、重機等調査機械の進入経路や掘削方法、掘削土の仮置き場などの発掘調査計画を立て、以後これに沿つた形で調査を進めた。現道など調査不能箇所となる部分を除き、各区間は可能な限り連続性をもって調査することに努め、②区→①区→③区→④区→⑩区→⑨区→⑤区→⑦区→⑧区の順で発掘調査を実施した。なお、⑥区と⑪区については、十分な調査幅が確保できなかつたため発掘調査は不可能と判断し、工事立会調査を実施した。

2 遺構深度の確認と遺構検出

今回の道路改良工事の約60%が新規建設道路で、残りは現道の拡幅改良となる。

計画道路幅は10.5mを測り、一部を除き十分な調査幅を確保できるものであったが、平成13年度の調査成果から、遺構面（水田面）までの深さが2m前後となることが予想された。そこで、各工区の発掘調査着手前に試掘調査を実施し、遺構の検出される深さを把握することとした。

この試掘調査結果に基づき、地表からの掘削が1.5m以上となる地点については、調査区壁崩落の危険性を回避するため、法面や段を設けるなどの掘削方法を探った。また、調査区が田畠や道路に隣接する箇所が大半であったため、調査区境から1mほどの緩衝地帯を設け、近隣の土地に掘削による影響が及ばないようにした。

調査に伴う掘削には重機（バックホー0.25m³・0.45m³）を援用した。試掘調査データから、まず、各工区の全域にわたって確認される、仁和4年（888年）の千曲川大洪水によるとみられる砂質土（以後「仁和洪水砂」とする。）の上面に遺構確認面を設定し、これを振り込む遺構の有無の確認をおこなつた。仁和洪水砂の検出は現地表面より30cm～70cmを測り、耕作等による掘削で上面が既に破壊されていることも考えられるが、各工区において仁和洪水砂を振り込む遺構は確認できず、遺物の出土もなかつたため、少なくとも10世紀を下る遺構はないものと判断した。

これにより、調査面を仁和洪水砂直下に設定（一次調査面）し、バックホーによる掘削は調査面から約30cm上面で止め、残りは手作業による仁和洪水砂の除去と遺構検出をおこなうこととした。

今回の調査区全域で水田跡あるいは畠跡が確認され、検出に際しては、乾燥に伴うひび割れや人の往来、凍結による遺構面の損傷等がないように、遺構面上に砂が僅かに残る程度で止めてシートで保護し、写真撮影をする直前に残りの砂を除去する手順をとった。

一次調査面の調査が終了した段階で下層遺構を確認するためのトレンチを設定し、下層遺構の確認ができた場所を手作業もしくはバックホーにより掘削をおこない、二次調査面として調査を実施した。

3 遺構番号の付与と遺構の記録

水田遺構については、遺構として認識できるのが畦畔のみであるため、検出された頃に番号を付した。また、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡、土坑なども、それぞれ遺構番号を付している。

検出された遺構については、平面図及び断面図、写真撮影により記録した。

平面図は、調査区内に任意の測量点を設定し、これを基準点として1/20で作成した。なお、基準点測量については業者に委託し、座標及び標高を求めている。

各遺構の土層断面図については、必要に応じて作図した。

写真は、通常時は35mmの白黒とカラーリバーサルで撮影し、必要に応じてデジタルカメラを用いた。

遺物集中箇所等では6×7のカラーリバーサル撮影をおこなっている。

4 整理調査

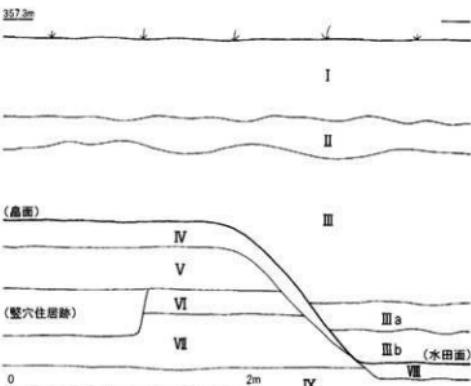
各年度発掘調査終了後に、出土した遺物の整理のみを先行して実施し、残りの作業は平成23年度に実施した。遺物は、遺構ごとに取り上げた日付、出土位置等を台帳に記し、それぞれ洗浄・注記・接着・実測・復元の順で作業をおこなった。

平面整理にあたっては、現場において作成した1/20の平面図を基に、個別の遺構図を統一した縮尺により作成した。遺物実測及び添書は原則原寸でおこなった。

第2節 基本層序

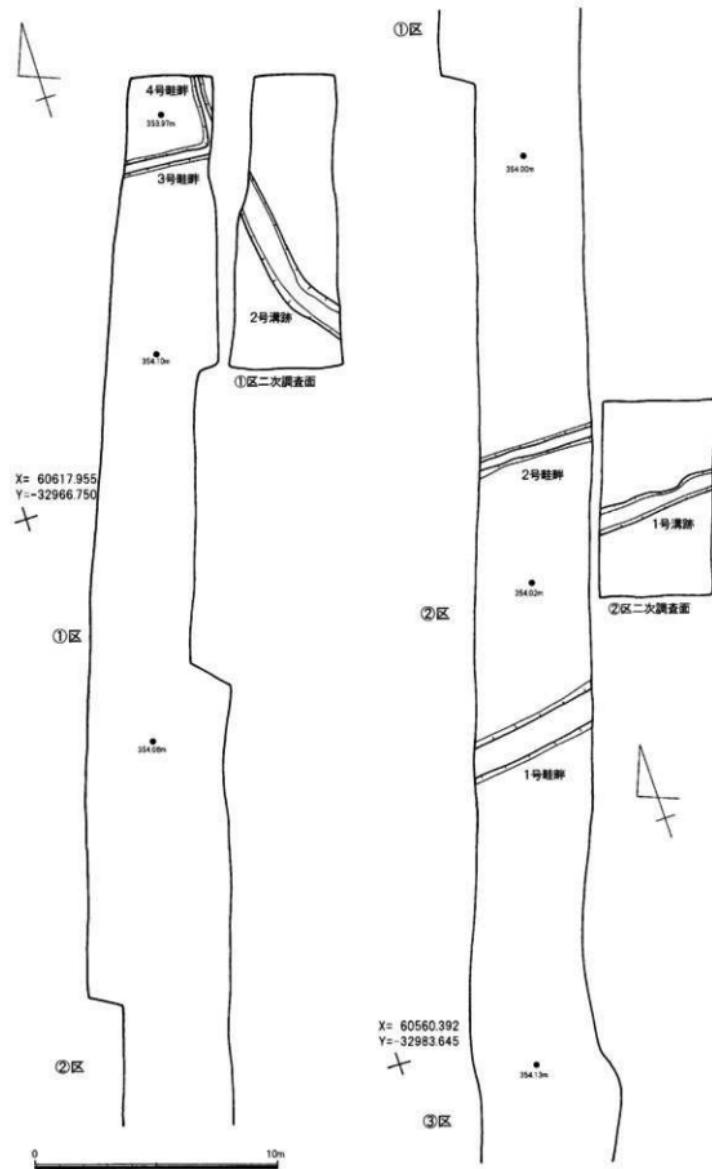
今回の調査は広範囲にわたっているため、各地点で若干の相違はあるが、層序は概ね同一である。

I層は現地目が水田か畠地かで内容は変化するが、水田では灰褐色の粘質土が10cm程度、畠地では暗褐色の砂質土が40~60cm程度となる。II層~IIIa層までは砂質土となり、仁和の洪水砂層に対応する。地表下30~70cmで上面が確認でき、部分的に軽石が含まれる場所もある。上部は黒褐色（II層）、その下層

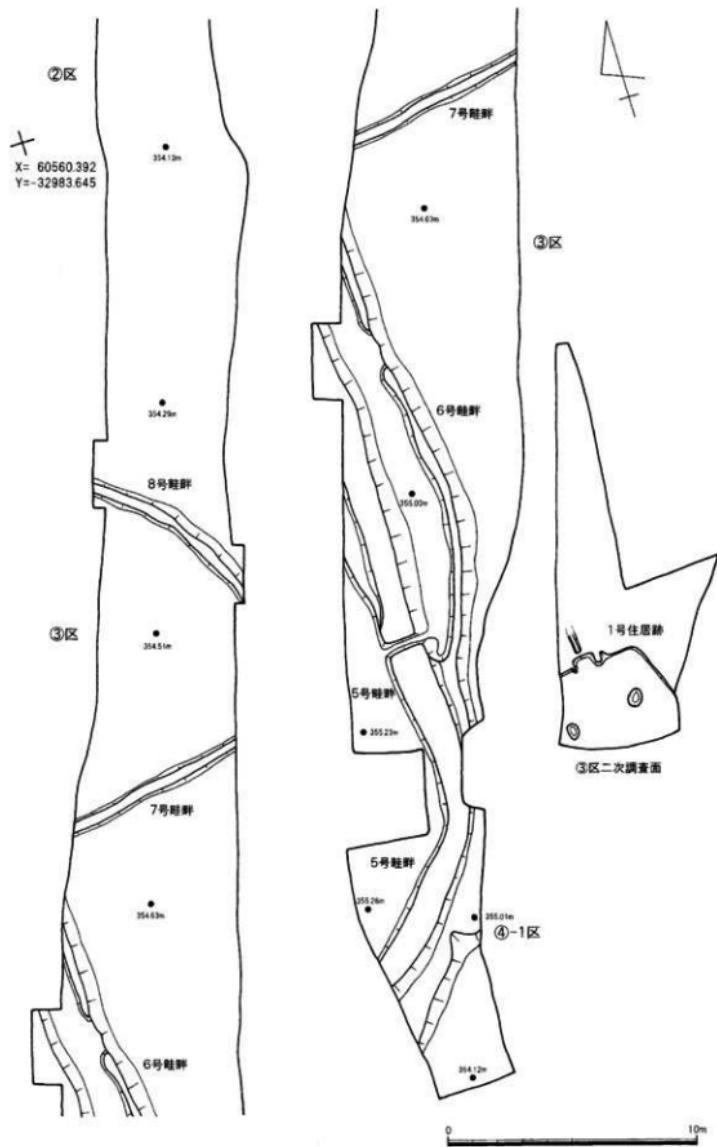


第4図 基本土層 (1 : 40)

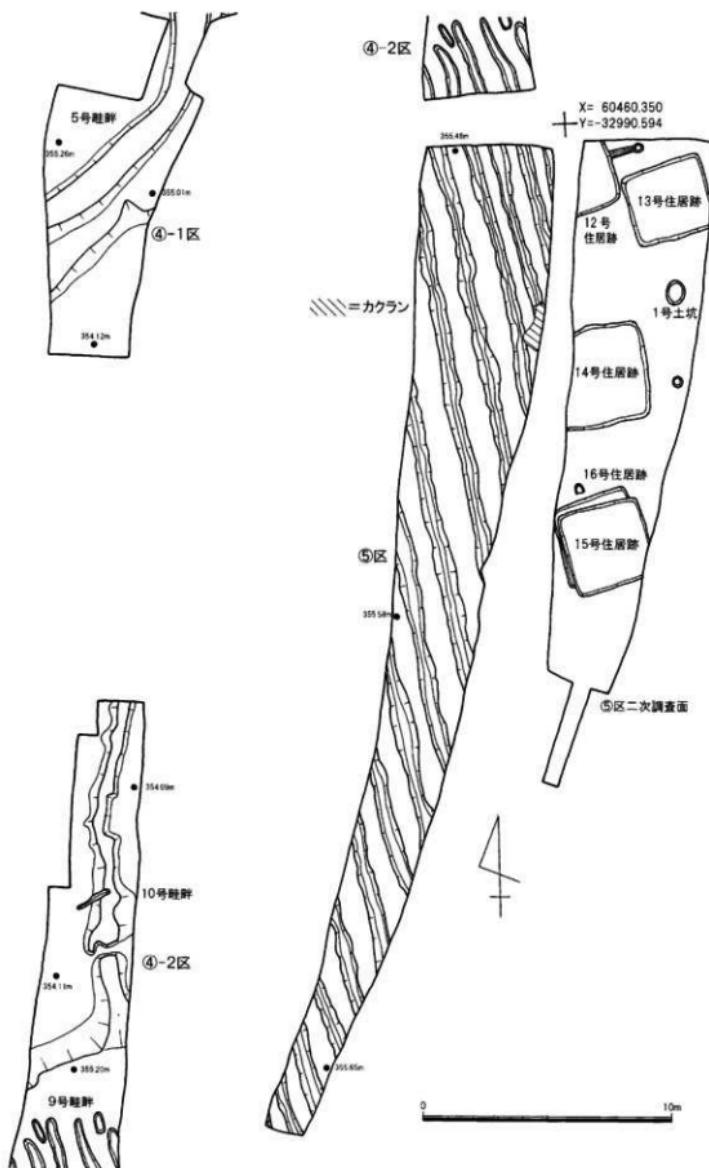
は黄褐色（III層）を呈し、最下層では明灰褐色や茶褐色系（IIIa層）に色調が変化する箇所もある。IIIb層は、砂質土（III層もしくはIIIa層）と粘質土（IV層）の混合層である。IV層は褐色のシルト質土で、地形の高くなる部分には普遍的に存在し、V層は暗褐色シルト質土を呈する。いずれも平安時代の遺物包含層となる。VI層は茶褐色のシルト質を呈し、二次調査面を設定した層である。竪穴住居跡などのほとんどの遺構は、このVI層を掘り込んで構築されている。VII層は黄褐色シルト質土、IX層は褐色砂質土となり、それぞれ遺物は含まれない。VIII層は灰色粘質土で水田対応層となる。



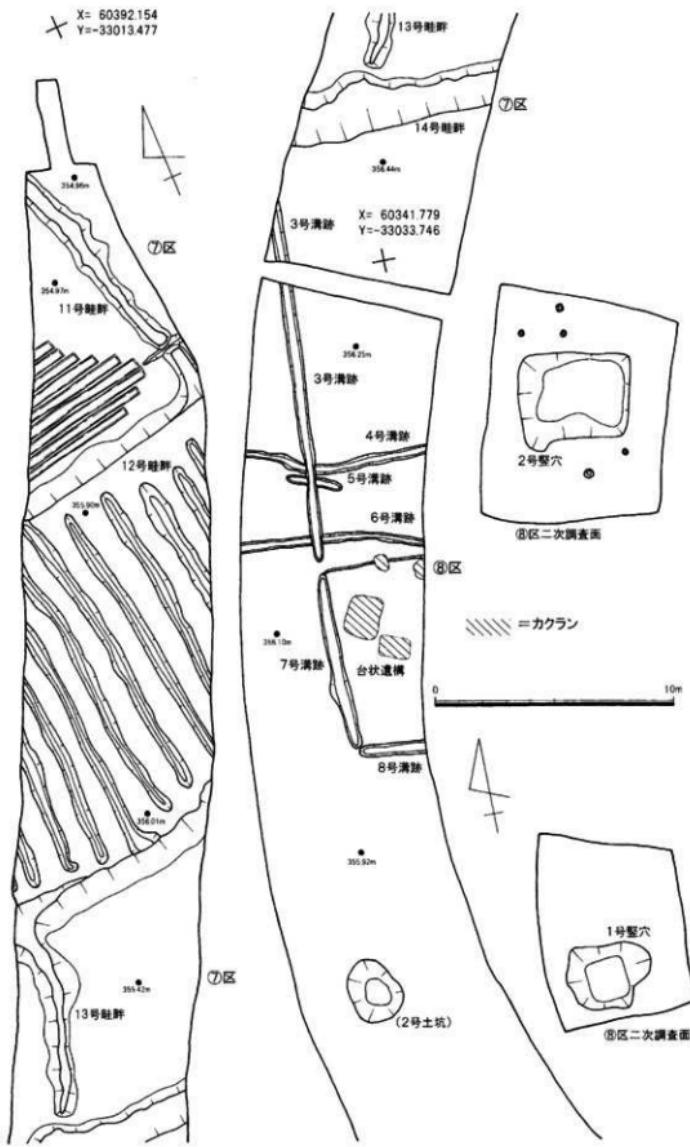
第5図 全体図① (1 : 200)



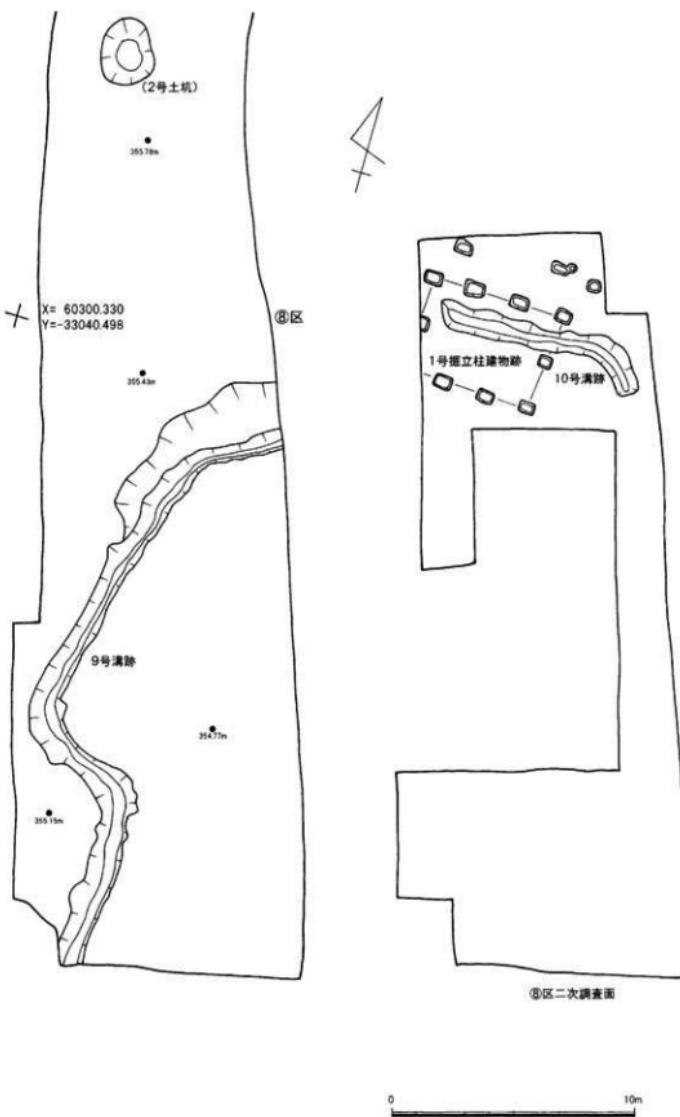
第6図 全体図② (1 : 200)



第7図 全体図③ (1 : 200)

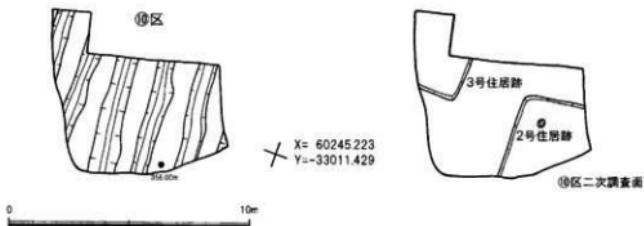
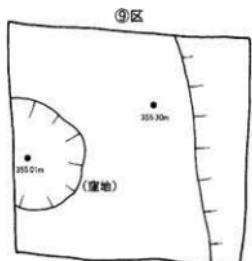


第8図 全体図④ (1 : 200)



第9図 全体図⑤ (1 : 200)

X= 60276.748
Y=-33021.112



第10図 全体図⑥ (1 : 200)

第3節 水田跡

水田面

①区～④区と⑦区、⑧区で、水田に対応する灰色または暗灰色を基本とした粘質土壤の堆積がみられた。いずれも砂質土、もしくは砂質土と粘質土の混合土に被覆されるものである。

⑦区の11号畦畔西側には、連続する幅40cmほどの溝状の掘り込みが畦畔に直行する形で掘られており、その状況から田起こしの痕跡とみられる（第13図）。溝状造構内部には粘土塊と砂が混合している箇所が随所にみられ、12号畦畔直下には、ここから流出したと思われる粘土塊の集積が確認されている。また、⑦区の13号畦畔東側は水田面の凹凸が著しく、粘土内に砂が混ざり込んでいた。

1号畦畔

②区で検出された畦畔である。上幅110cm、下幅160cm、高さは約20cmを測り、ほぼ東西方向に走る。上面は平坦で、断面は台形となる。

2号畦畔

②区で検出された畦畔で、1号畦畔の北約11mの位置で検出された。上幅40cm、下幅60cm、高さ7cmを測る。上面は丸みを帯び、断面は蒲鉾形を呈する。1号畦畔同様、東西に方向をとる。

3号畦畔

①区の北端で検出され南北方向に走る。上幅20cm、下幅50cm、高さ10cmを測り、断面は蒲鉾形を呈している。南側で4号畦畔と接続する。

4号畦畔

3号畦畔と接続する畦畔で、東西に方向をとる。上幅40cm、下幅60cm、高さは4cmを測る。上面は平坦となり、断面は台形を呈する。

5号畦畔

③区で検出された南北に走る畦畔で、東側には6号畦畔が弧を描きながら併走している。西側は約20cmの高さに対し、東側は40cmほど落ち込んだ後、6号畦畔へと達する。上幅で150cm～200cm、下幅で200cm～300cmを測り、④-1区へとつながるが西側へ大きく湾曲している。

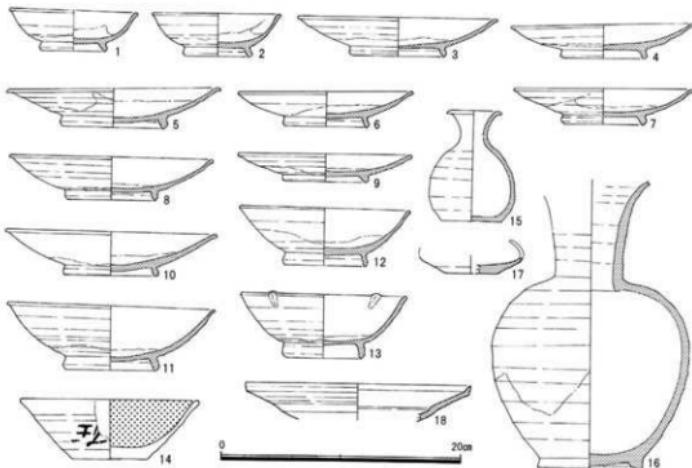
畦畔を横断する水口と思われる溝状の切り込みが1箇所に設けられており、この付近から6号畦畔が分岐する。

畦畔東側法面から6号畦畔にかけて灰釉陶器の小型碗2点（1・2）、皿8点（3～10）、碗3点（11～13）、小型壺1点（15）、長頸壺1点（16）の合計15点がまとまって出土している。また、この灰釉陶器群の南側から土師器壺（14）、灰釉陶器の耳皿（17）と段皿（18）が出土している。

灰釉陶器の皿及び碗は内外面ともに刷毛により釉薬が塗布されており、焼成の際に自然釉が付着したものもみられる。13は口縁部4箇所に摘み上げを持つ輪花碗となる。14は内面が黒色処理され、外面には逆位に書かれた「在」の墨書きがみられる。

6号畦畔

5号畦畔から分岐した畦畔で、分岐付近は明瞭な畦畔状の盛り上がりが確認できるが、北に行くにつながって不明瞭となる。東側の水田面までは約40cmの落ち込みを持ち、5号畦畔から東側水田面までの比高差は最大で90cmを測る。上幅は40cm前後、下幅は120cm前後を測る。



第11図 5号畦畔出土遺物 (1 : 4)

7号畦畔

③区の中央付近で検出された畦畔で、上幅40cm、下幅70cm、高さ10cmを測り、東西方方向に走る。断面は蒲鉾形を呈する。

8号畦畔

5号畦畔の灰釉陶器群が出土した地点から北東へ約20m離れた位置で検出され、上幅50cm、下幅100cmを測り、弧を描いている。

この8号畦畔を挟んで南側と北側では水田面に約40cmの段差が存在しており、北側の低い部分から畦畔に沿うような形で、灰釉陶器の皿4点（1～4）、碗3点（5～7）、短頸壺1点（12）、小型壺1点（13）のほか、土師器の壺3点（8～10）と碗1点（11）、須恵器の四耳壺1点（14）が出土している。

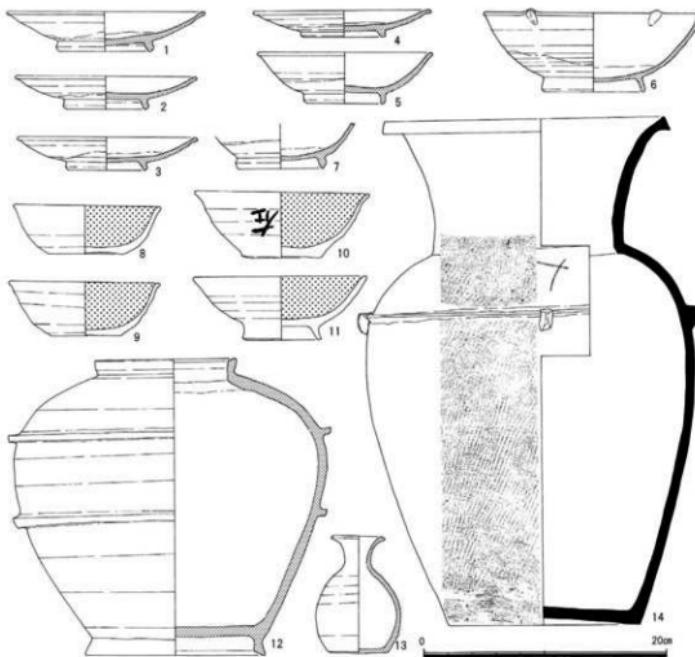
灰釉陶器の皿と碗は外面とも刷毛により釉薬が塗布され、中には自然釉が付着しているものもある。6は口縁部に4箇所の摘み上げを持つ輪花碗となる。12の肩部と胴部にはそれぞれ1本ずつの突帯がめぐる。口縁部は短く直立し、底部には高台を持つ。肩部から下部突帯まで刷毛による釉薬が施されており上部には自然釉も付着する。内面は指でナデたように器面の凹凸が著しい。

土師器の壺と碗は、それぞれ内面が黒色処理され、10には逆位により書かれた「在」の墨書がみられる。14は肩部に突帯をめぐらし4箇所に突起を持った須恵器の四耳壺で、肩部には「×」の線刻がある。

9号畦畔

④区南端で検出されたものである。検出範囲が狭かったため当初は大型の畦畔として認識して調査を進めたが、その後の⑤区の調査において地形が高くなる部分であることが判明した。

上面には幅80cm前後で深さが5cm～10cmを測る鉄状遺構が検出されており畠跡となる。



第12図 8号畦畔出土遺物 (1 : 4)

10号畦畔

9号畦畔より分岐し、北側へ伸びて行く畦畔である。9号畦畔から緩やかに落ち込み、比高差は110cmを測る。落ち込んだ部分に水口が1箇所確認されている。

11号畦畔

⑦区北端に検出された畦畔で12号畦畔から北側へ分岐し、北よりやや西側に振れている。接続部分に水口が設けられており、上幅50cm前後、下幅100cm前後、高さ10cmほどを測る。

12号畦畔

上幅で約14mを測る。④区と⑤区同様、歫状構造が上面に検出されており、畦畔ではなく地形が高地となる部分に作られた畠跡となる（第13図）。

13号畦畔

12号畦畔から南へ伸びる畦畔で僅かに弧を描いている。14号畦畔との接続部分に水口状の断絶部があり、上幅30cm、下幅100cm、高さ20cmを測る。

14号畦畔

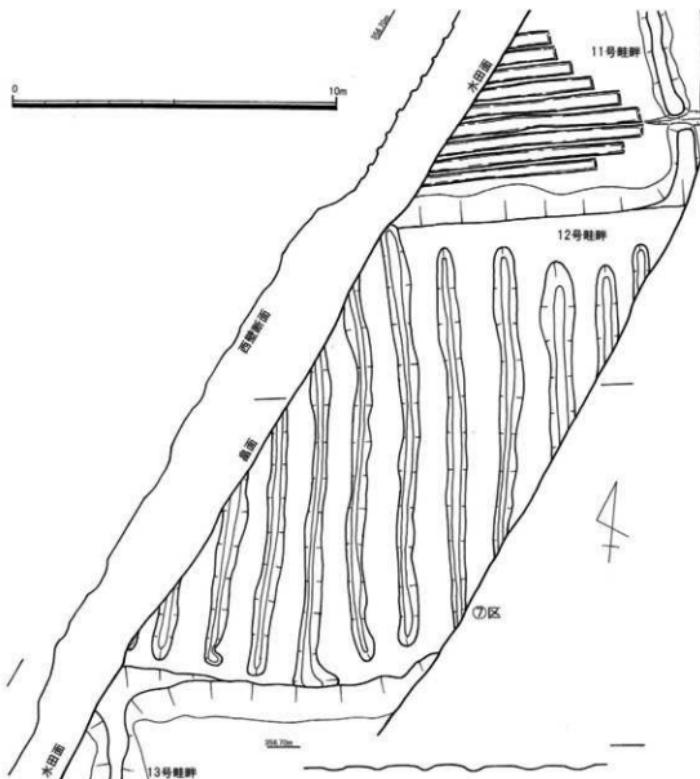
9号畦畔及び12号畦畔同様地形が高くなる部分となるが、畠跡のような歫状の凹凸はみられず、溝状の浅い落ち込みが、南北に1基（3号溝跡）、東西に3基（4号～6号溝跡）検出され、この部分より南側へ地形が緩やかに傾斜していく。

第4節 島 跡（畝状遺構）

④区・⑤区・⑦区・⑩区それぞれで、幅60cm～80cmを測る連続する畝状遺構が検出され、深さは5cm～10cmを測るものである。畝状遺構は南北方向に約1mの間隔をもって併行して掘られている。いずれも、地形の高くなる部分に作られており、その状況から島跡を想定する。

⑤区は、調査区全体に検出され、合計で16通りの畝状遺構が確認されている。④区南端（9号畦畔）で検出された溝状遺構と連続するもので、⑤区南側は調査幅が狭くなるため調査できなかったが、さらに南へ続いているものと思われる。

⑦区は、12号畦畔とした南北幅14mを測る高地に作られており12通りの畝状遺構が検出されている。⑩区は、調査範囲が限られていたため判然としないが、6通りの畝状遺構が確認できた。畝状遺構の検出された他の2箇所は比較的平坦であったのに対し、⑩区は東側に地形が大きく落ち込んでいく格好となり、調査区東側に低地となる部分が存在している可能性が考えられる。



第13図 ⑦区12号畦畔 畝状遺構 (1 : 150)

第5節 堅穴住居跡

1号住居跡

調査区：③区

時期：奈良時代（8世紀中葉）

規模：不明 平面形：方形

主軸方向：N - 7° - W

床面：堅緻 カマド：北壁

柱穴：2基

調査状況：5号畦畔と6号畦畔

の断面を観察するために設けた

トレーナーにおいて煙道が確認さ

れたため、畦畔断面の調査後、

南側へ二次調査面への掘り下げ

をおこなったところ検出された

住居跡である。

調査区の南端であったため全

体を調査することはできなかつ

たが、カマドが北壁中央付近に、

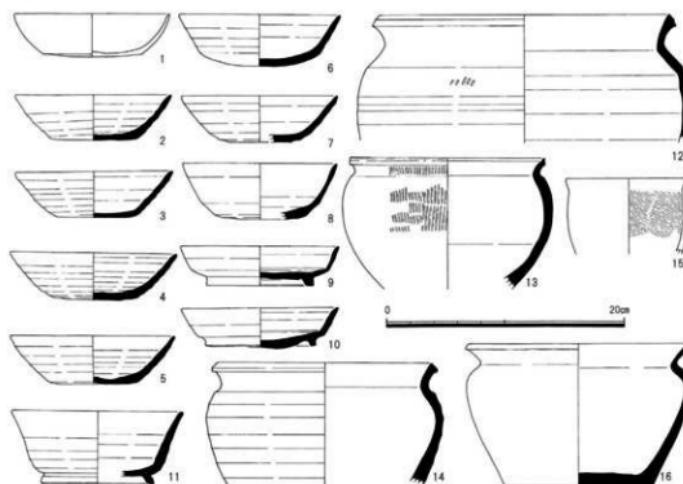
張り出し状に構築される。床面

は、中央付近で堅緻となり、焼

土と炭化物が広く分布している。



第14図 1号住居跡 (1 : 60)



第15図 1号住居跡出土遺物 (1 : 4)

出土遺物には、土師器壺（1）、須恵器壺（2～10）、須恵器碗（11）、須恵器甕（12～14）、土師器甕（15）、須恵器鉢（16）がある。

1は内面が丁寧に磨かれているが、黒色処理はされない。須恵器の壺は、いずれもロクロナデによる器面の凹凸が著しく、底部は回転ヘラ切りにより切断されており、後にヘラケズリもしくはナデにより整形されている。12と13の外面にはタタキ、15の内面にはハケがみられる。

2号住居跡

調査区：@区 時期：平安時代（9世紀前半）

規模：不明 平面形：方形 主軸方向：不明

床面：堅穢 力マド：未検出 柱穴：1基

調査状況：畝状造構（畠跡）の調査後、下層造構の調査において検出された住居跡である。

調査区が狭く、南端で検出されたため全体を調査できていない。範囲内においてカマドも確認できなかつたことから、主軸方向や住居規模などは不明である。

床面は住居の中央付近で非常に堅穢となる。柱穴が1基確認され、この柱穴より外側の床面は軟弱となる。

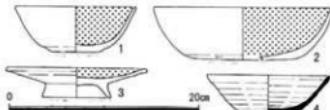
出土遺物には、土師器壺（1・2）、土師器皿（3）、須恵器壺（4）がある。

1～3は内面が黒色処理され、底部は回転ヘラ切りにより切断された後、2はヘラケズリにより整形される。3は高台が貼り付けられる。

4はロクロナデによる器面の凹凸が著しく、底部は糸切りによる。



第16図 2号住居跡 (1 : 60)



第17図 2号住居跡出土遺物 (1 : 4)

3号住居跡

調査区：@区 時期：平安時代（9世紀前半？）

規模：不明 平面形：方形 主軸方向：不明

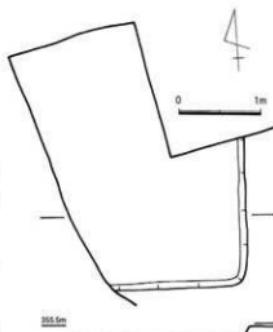
床面：堅穢 力マド：未検出 柱穴：未検出

調査状況：2号住居跡同様、畝状造構の調査後におこなった下層造構の調査において、調査区の北端に検出された住居跡である。

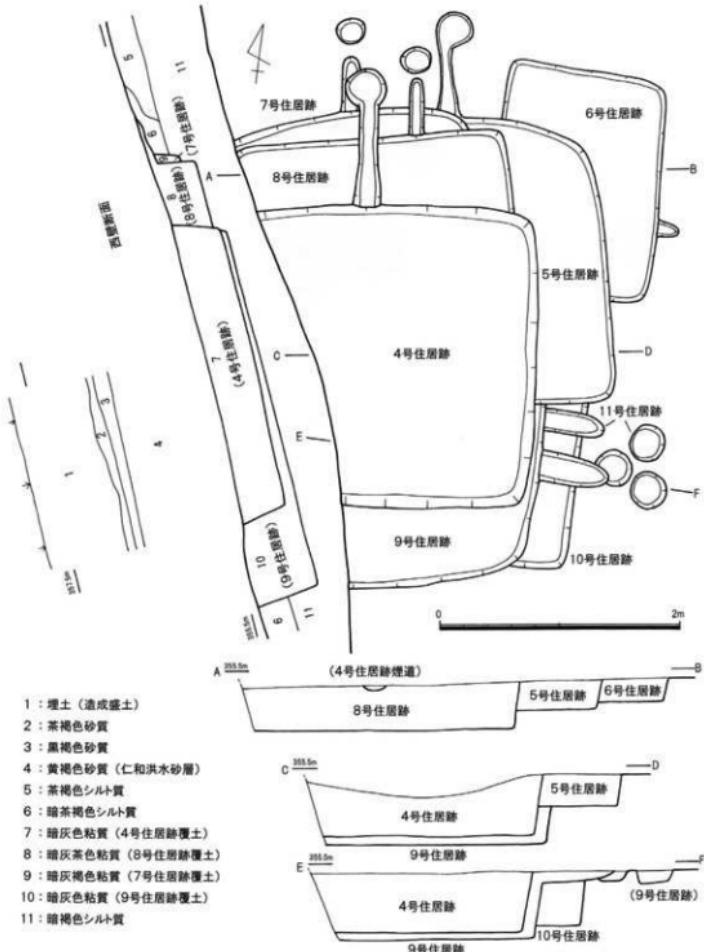
北東側は搅乱により破壊され、北側及び西側は調査区域外となる。

カマドは、調査範囲内では検出されておらず主軸方向や住居規模は不明である。

出土遺物は、土師器の壺や須恵器の壺などが少量出土したのみで國化できるものはなかったが、その様相から9世紀前半の住居跡を想定する。



第18図 3号住居跡 (1 : 60)



第19図 4号住居跡～11号住居跡 (1:60)

4号住居跡

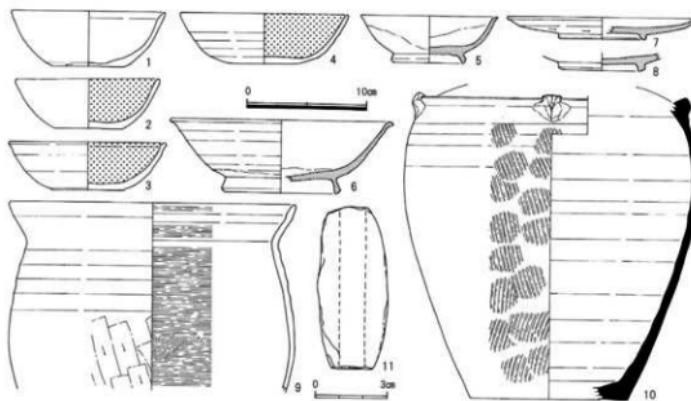
調査区：⑧区 時期：平安時代（9世紀後半） 規模：3.8m × - 平面形：方形

主軸方向：N - 8° - W 床面：堅緻 力マド：北壁 柱穴：未検出

調査状況：一次調査面で直径4.5m、深さ約20cmを測る壪り鉢状の窪みが確認されたため、トレング調査をおこなったところ、複数の煙道とともに重複する堅穴住居跡が確認された。

出土遺物には、土師器壺（1～4）、灰釉陶器碗（5・6）、灰釉陶器皿（7・8）、土師器甕（9）、

須恵器壺（10）がある。2～4は内面が黒色処理される。8の内面は研磨されたように光沢があり、墨汁のような黒い付着物もあることから、硯に転用している可能性が高い。11は土製の鍤である。



第20図 4号住居跡出土遺物（1：4 11のみ1：2）

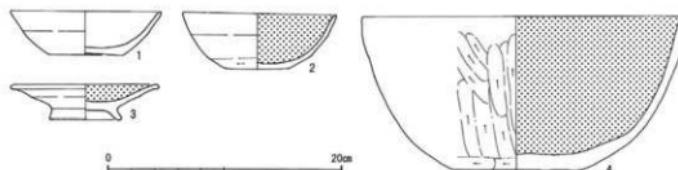
5号住居跡

調査区：⑥区 時期：平安時代（9世紀前半） 規模：3.5m × - 平面形：方形

主軸方向：N - 9° - W 床面：軟弱 カマド：北壁 柱穴：未検出

調査状況：多くの住居跡と重複関係にある。遺構のほとんどを他の住居跡に破壊されている。

出土遺物には、土師器の壺（1・2）、皿（3）、鉢（4）がある。1以外は内面が黒色処理される。



第21図 5号住居跡出土遺物（1：4）

6号住居跡

調査区：⑥区

時期：平安時代（8世紀末～9世紀初頭）

規模：2.0m × 2.8m 平面形：方形

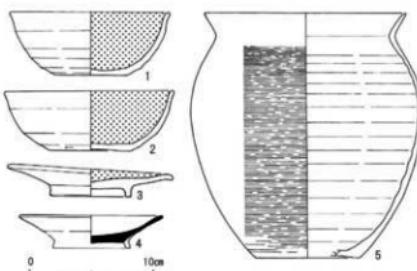
主軸方向：E 床面：堅緻

カマド：東壁 柱穴：未検出

調査状況：5号住居跡と重複関係にある。

出土遺物には、土師器の壺（1・2）、

皿（3）、壺（5）、須恵器皿（4）がある。



第22図 6号住居跡出土遺物（1：4）

7号住居跡

調査区：⑧区 時期：平安時代（9世紀中葉？） 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：N-10°-W 床面：軟弱 カマド：北壁 柱穴：未検出

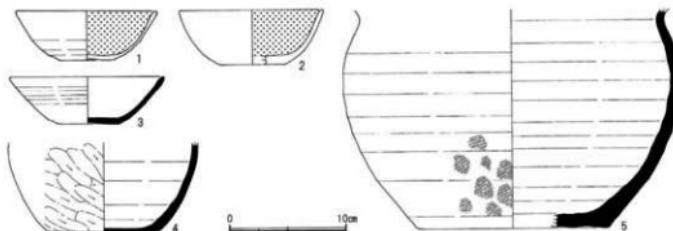
調査状況：8号住居跡の破壊を受けている。遺物の出土も少なく、固化できるものはなかった。

8号住居跡

調査区：⑨区 時期：平安時代（9世紀後半） 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：N-11°-W 床面：軟弱 カマド：北壁 柱穴：未検出

調査状況：出土遺物には、土師器壊（1・2）、須恵器の壊（3）と甕（4・5）がある。



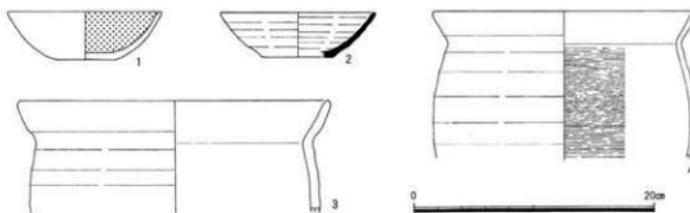
第23図 8号住居跡出土遺物（1：4）

9号住居跡

調査区：⑩区 時期：平安時代（9世紀前半） 規模：-×5.2m 平面形：方形

主軸方向：E 床面：堅緻 カマド：東壁 柱穴：未検出

調査状況：遺構のほとんどを4号住居跡に破壊されるが、4号住居跡より床面が深い部分で確認されているため、床面の状況は比較的良好に検出できている。



第24図 9号住居跡出土遺物（1：4）

10号住居跡

調査区：⑪区 時期：平安時代（8世紀末～9世紀初頭？） 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：E 床面：軟弱 カマド：東壁 柱穴：未検出

11号住居跡

調査区：⑫区 時期：平安時代（9世紀前半？） 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：E 床面：軟弱 カマド：東壁 柱穴：未検出

12号住居跡

調査区: ⑤区 時期: 平安時代(8世紀末~9世紀初頭)

規模: 不明 平面形: 方形 主軸方向: N-77°-E

床面: 軟弱 カマド: 東壁 柱穴: 未検出

調査状況: 調査区の北端に検出された遺構である。

当該調査区は、一次調査面において崩壊(崩壊遺構)

が検出され、下層遺構の確認のため設けたトレンチ内で
検出できた住居跡である。

東壁にカマドが設けられており、床面はカマド付近で
僅かに堅敏となる。

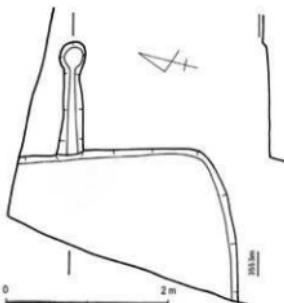
出土遺物には、土師器壺(1・2)、須恵器壺(3)、

土師器壺(4)がある。

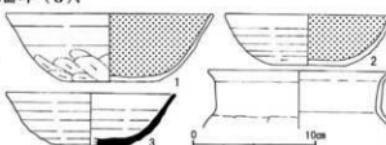
1・2は内面が黒色処理され、底部は糸

切りによる。3はロクロナデによる器面の

凹凸が著しく、底部は糸切りとなる。



第25図 12号住居跡 (1:60)



第26図 12号住居跡出土遺物 (1:4)

13号住居跡

調査区: ⑥区 時期: 奈良時代(8世紀後半)

規模: 3.1m × 3.2m 平面形: 方形

主軸方向: 不明 床面: 堅敏 カマド: 未検出

柱穴: 未検出

調査状況: 調査区北端に設けたトレンチ調査で下層

遺構が検出されたことから、バックホーにより二次

調査面への掘削をおこない検出された住居跡である。

以下、16号住居跡まで同様である。

東隅の一部が調査区域外になっている以外は、全
体が良好に検出され、床面も中央付近で非常に堅敏

となる。柱穴は確認できなかったが、床面西側に焼

土の塊を検出している。

当該地の住居跡のカマドは、北も

しくは東の壁に構築されていること

から、当該遺構は東に構築されてい

るものと思われるが、カマドを想定

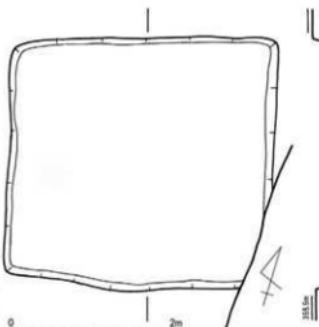
するような遺構は確認できなかった。

出土遺物には、須恵器壺(1~3)

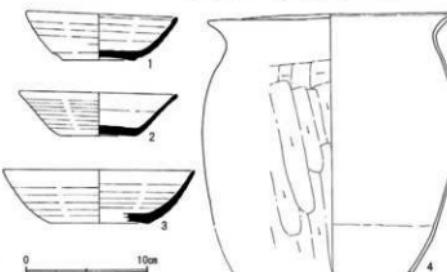
と土師器壺(4)がある。

4は外側がヘラケズリにより整形

された武藏壺となる。



第27図 13号住居跡 (1:60)



第28図 13号住居跡出土遺物 (1:4)

14号住居跡

調査区：⑤区

時期：平安時代（9世紀前半）

規模：— × 4.0m 平面形：方形

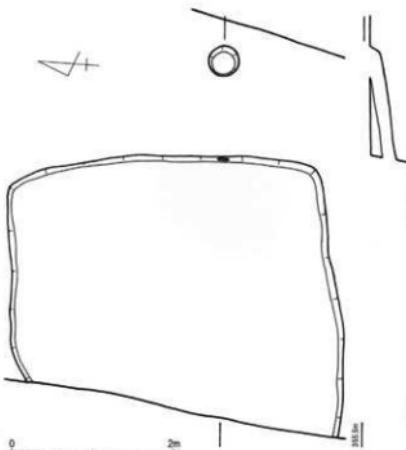
主軸方向：N - 86° - E 床面：軟弱

カマド：東壁 柱穴：未検出

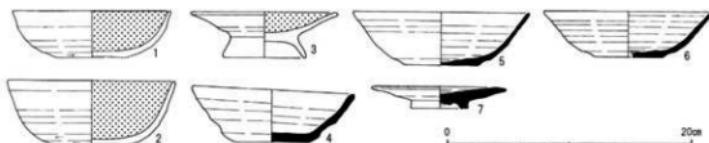
調査状況：他遺構との重複関係はないが、西側は調査区域外により検出できていない。カマドは東壁に構築され、カマド付近は非常に堅緻な床となる。

柱穴は検出されておらず、カマド付近に比較して中央部分の床面は軟弱となる。

出土遺物には、土師器壺（1・2）、土師器盤（3）、須恵器壺（4～6）、須恵器皿（7）がある。土師器は内面が黒色処理され、須恵器の壺はやや軟質な胎土となる。



第29図 14号住居跡（1:60）



第30図 14号住居跡出土遺物（1:4）

15号住居跡

調査区：⑤区

時期：平安時代（9世紀前半）

規模：3.4m × 3.4m

平面形：方形

主軸方向：N - 74° - E

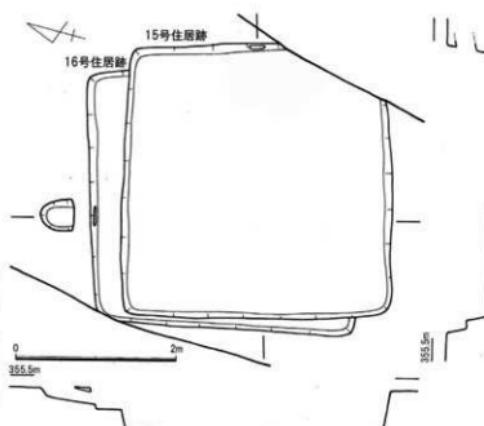
床面：堅緻 カマド：東壁

柱穴：未検出

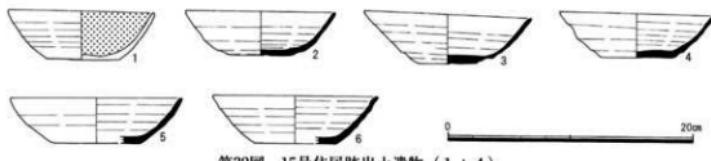
調査状況：16号住居跡と重複関係にある。東隅付近が調査区域外となるため全体の検出には至っていない。カマドは東壁に構築されている。柱穴等は確認されていない。

出土遺物には、土師器壺（1）

と須恵器壺（2～6）がある。



第31図 15号・16号住居跡（1:60）



第32図 15号住居跡出土遺物 (1 : 4)

16号住居跡

調査区：⑥区 時期：平安時代（9世紀後半？） 規模：3.3m×3.1m 平面形：方形

主軸方向：N - 15° - W 床面：軟弱 カマド：北壁 柱穴：未検出

第6節 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

調査区：⑧区

時期：平安時代（9世紀前半）

規模：6.3m×4.5m

平面形：長方形

主軸方向：N - 88° - W

調査状況：⑧区一次調査面の調査を終了した後、下層造構の確認のため設けたトレンチ調査において複数の土坑が検出され、周囲を広げ確認したところ、長方形土坑が規則的に並ぶことが判明し、掘立柱建物跡とした。

桁行三間、梁間二間。10基（検出は9基）の柱穴により構成される。柱穴内に柱痕は認められていないが、柱穴間は桁行側で約1.8m、梁間側で約2mを測る。

出土遺物には、土師器壺

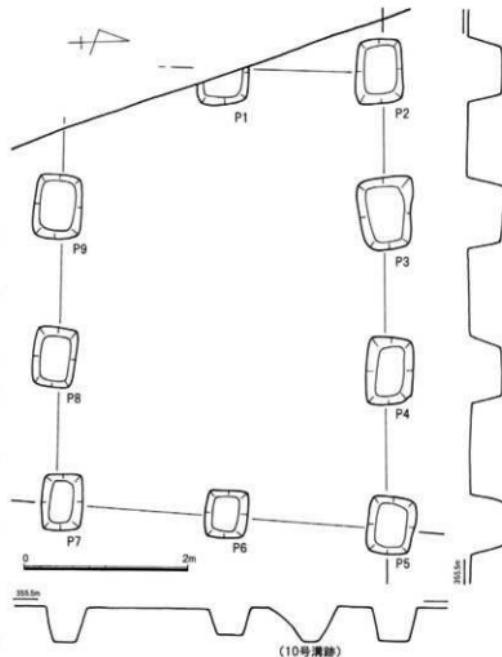
(1)、灰陶器皿(2)、綠

釉陶器壺(3)が

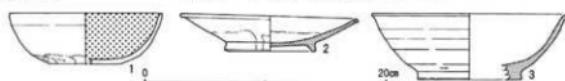
あり、すべてP3

内から出土してい

る。



第33図 1号掘立柱建物跡 (1 : 60)



第34図 1号掘立柱建物跡出土遺物 (1 : 4)

第7節 土坑・溝跡・その他の遺構

1号土坑

⑥区の二次調査面において13号住居跡と14号住居跡の間で検出された土坑で、長辺96cm、短辺74cm、深さ45cmを測り梢円形を呈する。覆土は暗褐色シルト質土の単層で、炭化物が比較的多く混入する。覆土内容は周辺で検出された竪穴住居跡と酷似する。

出土遺物は、土師器壺が1点（第35図1）のみである。内面が黒色処理されており、外面の底部付近から底部にかけてヘラケズリされる。

2号土坑＝1号竪穴

1号溝跡

②区二次調査面において検出された遺構で、幅90cm、深さ18cmを測る溝跡である。ほぼ東西方向に直線に掘られ、一次調査面において検出された2号畦畔とは1m20cmほど南に位置するが並走する形となる。

遺物は、須恵器壺（第35図2）が出土している。底部は、回転ヘラ切りにより切断された後、ナデにより整形されている。

2号溝跡

①区の二次調査面で検出された遺構で、幅120cm、深さ28cmを測る。南北方向に掘られ、僅かに湾曲する。

出土遺物は、土師器壺（第35図3・4）と須恵器壺（第35図5）がある。土師器の壺はいずれも内面が黒色処理されており、3の底部外面はヘラケズリされている。5は底部が回転ヘラ切りの後に高台が付される。

3号～6号溝跡

⑦区南端から⑧区にかけて検出された遺構群で、一次調査面を覆っている砂質土を覆土にもつものである。幅は30～60cmを測り、深さは5cm前後と非常に浅い。南北に検出された3号溝跡に対し、4号～6号溝跡はこれに直行する形で東西方向に検出され、4号溝跡と6号溝跡を経るにしたがって地形が傾斜しながら30cmほど低くなっていく。遺物の出土はない。

7号・8号溝跡（台状遺構）

⑧区の3号溝跡の延長線上に検出された7号溝跡と、直角に曲がる8号溝跡に囲まれた部分が僅かに高くなる台状遺構を呈している。この溝跡も砂質土を覆土とする遺構で、遺物の出土はない。

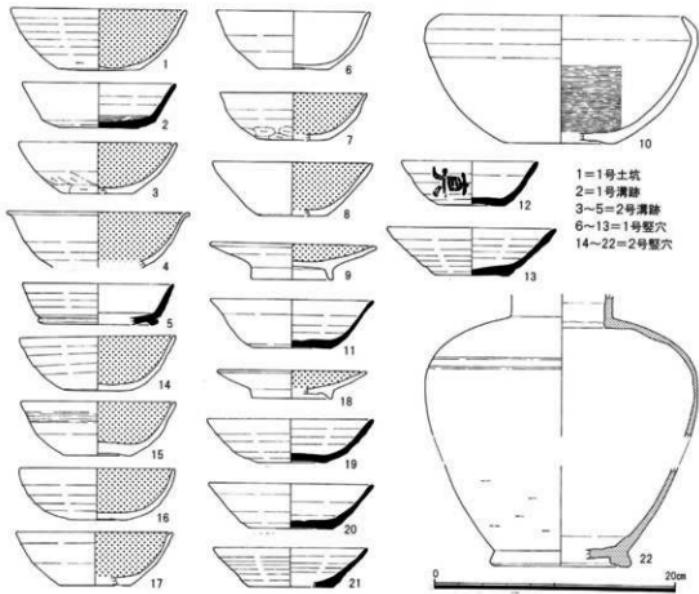
台状遺構は、南北方向8mを測るもので、周囲より7cmほどの高まりを持つ。4箇所に掘乱があるものの、台状遺構上に掘り込みは存在せず、その性格は不明である。遺物の出土もない。

9号溝跡

⑧区の中央付近から南端にかけてS字状の地形の落ち込みが確認され、これに沿う形で溝状の掘り込みが検出された。底面は鉄分が沈着し赤茶色に変色し、凹凸が著しい。表面は非常に硬化している。

10号溝跡

⑧区の中央付近。二次調査面の1号掘立柱建物跡に沿う形で検出された遺構で、幅80cm、深さ46cmを測る。遺物は、土師器の壺や甕、須恵器の壺など数片が出土しているが、みな小破片で図化できるものはなかった。



第35図 土坑・溝跡・竪穴遺構出土遺物 (1 : 4)

1号竪穴

⑧区の一次調査面において、2.8m×2.0mの不整円形を呈する窪みが検出され、人為的な掘り込みではなかったが、2号土坑として遺構名を付した。遺構の様相が不自然であったことから、一次調査面の調査が終了後トレンチを設定して下層遺構の有無について確認した結果、下部に遺構が存在していることが判明し、周囲を掘り下げて全体の検出をおこなったところ、不整形に掘り込まれた竪穴状遺構が検出され、2号土坑は、この竪穴遺構の上面にあり、その部分が窪んだものと判断した。

出土遺物には、土師器の坏（第35図6～8）、皿（第35図9）、碗（第35図10）と須恵器坏（第35図12・13）がある。

土師器は内面が黒色処理される7～9とミガキだけの6、カキメが施される10がある。なお、9は一次調査面において検出した2号土坑内から出土したものであるが、2号土坑を被覆する砂質土内からではなく、下層のシルト質土内（1号竪穴覆土）から出土しているため当該遺構の遺物として扱った。12は「真」が横位に書かれた墨書き土器である。12・13ともやや軟質な須恵器となる。

2号竪穴

⑧区北端の下層遺構確認のためのトレンチ調査において検出された遺構で、南北3.7m、東西4.7mを測る不整長方形を呈し、底面までは40cmほどを測る。

底面は竪穴住居跡のような平坦な床ではなく凹凸が著しい。遺構の北側底面に炭化物の堆積する箇所も確認されているが、カマドとはならないことから性格の不明な竪穴遺構とした。

出土遺物には、土師器坏（第35図14～17）、土師器皿（第35図18）、須恵器坏（第35図19～21）、灰

釉陶器壺（第35図22）がある。

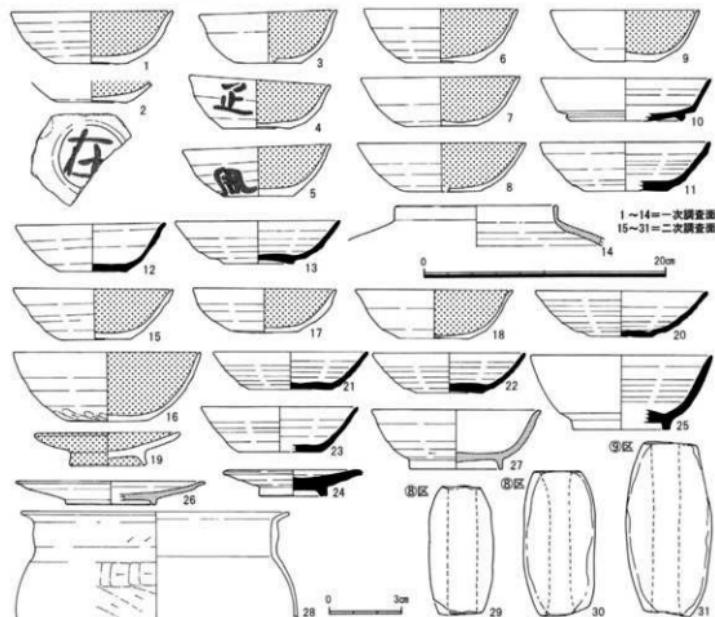
土師器の壺及び皿は、いずれも内面が黒色処理されている。須恵器壺の内20は胎土がやや軟質である。22は頸部から胴部破片と胴下半部から底部に至る破片で、接合はないが胎土や成形、調整等が似ているため同一個体とした。肩部に2本の条線が巡り、自然釉が付着している。

第8節 遺構外出土遺物

各調査区の調査面において遺構検出作業などで出土した、所轄遺構を明確にできない遺物である。一次調査面の調査で、水田跡や畠跡などの遺構面と、これを被覆している洪水中に伴う砂質土内から出土した遺物を「一次調査面出土遺物」、一次調査面下の遺構を確認するためのトレンチ調査や、遺構検出作業において出土した遺物を「二次調査面出土遺物」として区別し、遺構外出土遺物とした。

一次調査面出土遺物には、土師器壺（1～9）、須恵器壺（10～13）、灰釉陶器壺（14）がある。2の底面には「在」、4には「足」もしくは「疋」、5には「夙」と読める墨書がある。

二次調査面出土遺物には、土師器壺（15～18）、土師器皿（19）、須恵器壺（20～23）、須恵器皿（24）、須恵器碗（25）、灰釉陶器皿（26）、灰釉陶器碗（27）、土師器壺（28）がある。土製の鍤も3点（29～31）出土している。灰釉陶器の26は黒鶴14号窯式、27は光ヶ丘窯式となる。



第36図 遺構外出土遺物 (1～28=1:4 29～31=1:2)

第1表 出土遺物觀察表①

番号	器種	法 量 (cm)	外 面			形・調・文 様			備考
			口縫部	側部	底部	器高		内面	
5号罐群(第1回)									
1 瓶	碗	10.8	5.3	3.5	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.1
2 瓶	碗	10.8	5.1	3.6	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.12
3 瓶	瓶	16.7	7.5	3.2	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.2
4 瓶	瓶	15.3	6.8	3.0	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	自然釉付着	No.3
5 瓶	瓶	18.0	8.4	3.4	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.5
6 瓶	瓶	14.7	6.7	3.0	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	自然釉付着	No.6
7 瓶	瓶	15.0	6.5	3.0	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.9
8 瓶	瓶	17.1	7.3	3.6	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.10・16
9 瓶	瓶	14.5	6.5	2.3	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.11
10 瓶	瓶	17.8	7.4	3.7	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	自然釉付着	No.14
11 瓶	碗	17.5	7.5	3.5	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	自然釉付着	No.6
12 瓶	碗	14.3	6.6	4.9	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	自然釉付着	No.7
13 瓶	碗	13.8	6.2	5.5	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.15 桜花瓶
14 壺	壺	15.0	6.5	5.0	ロクロナデ	底部：糸切り 墨書「在」	黑色處理・ミガキ		No.17
15 壺	壺	4.6	7.2	5.0	9.3	ロクロナデ	口縫部に自然釉付着		No.6
16 壺	壺	16.5	8.7	24.2	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ 自然釉付着	口縫部附近に自然釉付着		No.13
17 壺	壺			4.4	1.5	ロクロナデ	自然釉付着		
18 壺	壺			18.7	3.0	ロクロナデ	自然釉付着		
8号罐群(第2回)									
1 瓶	瓶	16.3	7.2	3.3	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.6
2 瓶	瓶	14.9	6.3	2.8	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	自然釉付着	No.7
3 瓶	瓶	14.8	6.2	2.7	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.12
4 瓶	瓶	14.8	6.2	2.1	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	No.14
5 瓶	瓶	14.5	6.2	4.2	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ	自然釉付着	No.10

第2表 出土遺物観察表^②

番号	器種	法量(cm)	整 形・調 整・文 紋			内面	備考
			口縁部	脚部	底部		
6	碗	180	8.0	6.8	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ 施釉：刷毛がけ No.11 花文碗
7	碗	70	3.7	3.7	ロクロナデ	施釉：刷毛がけ	ロクロナデ No.8
8	杯	121	6.2	3.9	ロクロナデ	底部：糸切り	No.2
9	杯	124	5.7	4.6	ロクロナデ	底部：糸切り	No.3
10	杯	145	6.7	5.5	ロクロナデ	底部：糸切り 墨書「花」	黒色處理・ミガキ No.5
11	碗	144	6.6	5.2	ロクロナデ		黒色處理・ミガキ No.13
12	碗	117	25.8	14.8	24.3	點り付け突起2本 施釉：刷毛がけ	ロクロナデ→ナデ 自然釉付着 No.1
13	盃	4.5	7.1	4.9	9.7	ロクロナデ	自然釉付着(剥落多) 底部：糸切り ロクロナデ ナデ No.9
14	盃	232	27.2	15.8	41.5	ナデ 肩部～底部：タタキ 肩恩に「×」繙刻	No.4 四耳盃
1号主頭(漁158)							
1	杯	130	8.2	3.6	ロクロナデ	底部：ヘラケズリ	ミガキ
2	杯	131	7.1	3.9	ロクロナデ	底部：ヘラケズリ→ナデ	ロクロナデ
3	杯	132	6.4	4.0	ロクロナデ	底部：ヘラケズリ	ロクロナデ
4	杯	139	6.6	3.9	ロクロナデ	底部：回転ヘラ切り→ヘタケズリ	ロクロナデ
5	杯	137	5.9	4.2	ロクロナデ	底部：回転ヘタ切り→ヘタケズリ	ロクロナデ
6	杯	136	5.3	4.3	ロクロナデ	底部：ヘラケズリ→ナデ	ロクロナデ
7	杯	132	5.4	3.9	ロクロナデ	底部：ヘラケズリ	ロクロナデ
8	杯	130	6.0	4.7	ロクロナデ	底部：ヘラケズリ	ロクロナデ
9	杯	134	9.0	3.3	ロクロナデ	底部：回転ヘタ切り→高台	ロクロナデ
10	杯	133	9.4	3.2	ロクロナデ	底部：ヘラ切り→高台	ロクロナデ
11	碗	144	9.4	6.2	ロクロナデ	底部：ヘラケズリ→高台	ロクロナデ
12	盃	24.4	28.2	10.7	ロクロナデ・タタキ？		ロクロナデ
13	盃	164	17.8	11.0	ロクロナデ・タタキ		ロクロナデ
14	盃	182	20.2	10.4	ロクロナデ	器面彫れ	ロクロナデ・板ナデ？
15	盃	105	10.3	6.3	ナデ？	口縁部：ナデ	墨感：ハケ

第3表 出土遺物観察長③

番号	器種	法量 (cm)		整形・調整・文様			備考
		口幅部	脚部	底部	器高	外面	
16 錘	18.5	18.9	126	122	ロクロナデ	底部：ヘラケズリ→ナデ	ロクロナデ
2号住居跡 (第17図)							
1 壺	126	5.3	4.8	ロクロナデ	底部：圓底へナ切り	黒色処理・ミガキ	
2 壺	18.8	10.9	5.6	ロクロナデ・ヘラケズリ	底部：ヘラケズリ	黒色処理・ミガキ	
3 盆	14.9	7.1	3.1	ロクロナデ	底部：圓底へナ切り→高台	黒色処理・ミガキ	
4 壺	12.9	6.2	3.9	ロクロナデ	底部：系切り	ロクロナデ	
4号住居跡 (第20図)							
1 壺	127	6.0	4.6	ロクロナデ・ヘラケズリ	底部：系切り	ミガキ	
2 壺	12.0	5.6	4.2	ロクロナデ→ナデ	底部：ヘラケズリ	黒色処理・ミガキ	
3 壺	12.7	6.0	3.9	ロクロナデ	底部：系切り	黒色処理・ミガキ	
4 壺	13.8	6.0	4.2	ロクロナデ	底部：系切り→ヘラケズリ	黒色処理・ミガキ	
5 瓶	11.4	5.8	3.9	ロクロナデ	施袖：側毛毛穴け	ロクロナデ	
6 瓶	18.6	9.0	6.0	ロクロナデ	施袖：側毛毛穴け	ロクロナデ	自然輪行着
7 皿	15.6	6.9	1.9	ロクロナデ・ヘラケズリ	底部：圓底へナ切り→高台	ロクロナデ	
8 皿	23.6	6.2	1.5	ロクロナデ	光沢あり	軸用規	
9 壺	23.6	22.9	15.5	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ→カキメ・ハケ		
10 壺	24.4	13.2	25.2	ロクロナデ→タタキ	ロクロナデ	四耳壺	
5号住居跡 (第21図)							
1 壺	12.9	6.4	3.7	ロクロナデ	底部：圓底へナ切り	器面荒れ	ミガキ
2 壺	12.6	6.3	4.8	ロクロナデ・ヘラケズリ	底部：圓底へナ切り	器面荒れ	黒色処理・ミガキ
3 皿	12.7	5.7	3.0	ロクロナデ	器面荒れ	器面荒れ	黒色処理・ミガキ
4 鍤	27.3	11.0	13.1	ナデ→ヘラケズリ	底部：ヘラケズリ	器面荒れ	黒色処理・ミガキ
6号住居跡 (第22図)							
1 壺	12.9	5.8	5.1	ロクロナデ	底部：圓底へナ切り	黒色処理・ミガキ	
2 壺	13.7	6.6	5.1	ロクロナデ・ヘラケズリ	底部：圓底へナ切り	黒色処理・ミガキ	

第4表 出土遺物観察表(①)

番号	器種	寸法	量(cm)	整 形・調 整・文 標			備考
				外	内	面	
3 盆	口縁部 剥離 底部	65	2.6	クロロナデ	底部：円板へラ切り→高台	黒色處理・ミガキ	
4 皿	口縁部 剥離 底部	84	2.3	クロロナデ	底部：円板へラ切り→高台	黒色處理・ミガキ	
5 瓢	口縁部 剥離 底部	84	2.0	クロロナデ	底部：ロクロナデ→カキメ	ロクロナデ	
8号住居跡（第23図）							
1 瓢	口縁部 剥離 底部	55	4.2	クロロナデ	底部：糸切り	黒色處理・ミガキ	
2 瓢	口縁部 剥離 底部	54	4.6	クロロナデ	底部：円板へラ切り？	黒色處理・ミガキ	
3 瓢	口縁部 剥離 底部	52	4.0	クロロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
4 瓢	口縁部 剥離 底部	93	7.6	クロロナデ→ケズリ	底部：ヘラケズリ→ナデ	ロクロナデ	
5 瓢	口縁部 剥離 底部	166	18.5	クロロナデ・タタキ	底部：ナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	
9号住居跡（第24図）							
1 瓢	口縁部 剥離 底部	49	4.0	クロロナデ	底部：糸切り	黒色處理・ミガキ	
2 瓢	口縁部 剥離 底部	60	3.7	クロロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
3 瓢	口縁部 剥離 底部	242	9.3	クロロナデ		ロクロナデ	
4 瓢	口縁部 剥離 底部	216	21.8	クロロナデ		ロクロナデ・カキメ	
12号住居跡（第26図）							
1 瓢	口縁部 剥離 底部	80	5.5	クロロナデ・ヘラケズリ	底部：ヘラケズリ	黒色處理・ミガキ	
2 瓢	口縁部 剥離 底部	62	4.1	クロロナデ・ヘラケズリ	底部：ヘラケズリ	黒色處理・ミガキ	
3 瓢	口縁部 剥離 底部	64	4.3	クロロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
4 瓢	口縁部 剥離 底部	146	4.7	クロロナデ・ヘラケズリ		ロクロナデ・ナデ	
13号住居跡（第28図）							
1 瓢	口縁部 剥離 底部	60	4.0	クロロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
2 瓢	口縁部 剥離 底部	60	3.8	クロロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
3 瓢	口縁部 剥離 底部	80	4.4	クロロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
4 瓢	口縁部 剥離 底部	210	23.5	クロロナデ・ヘラケズリ		ロクロナデ・ナデ	

第5表 出土遺物観察表(5)

番号	器種	法量(cm)			整 形・調 整・文 標			備 考
		口縁部	脚部	底部	器底	外 面	内 面	
14号住居跡(第30図)								
1	坪	12.6	5.4	3.8	口クロナデ・ヘラケズリ	底部：糸切り	黒色處理・ミガキ	
2	坪	13.4	5.8	5.2	口クロナデ・ヘラケズリ	底部：圓輪ヘラ切り	黒色處理・ミガキ	
3	盤	11.0	6.6	3.7	口クロナデ・ヘラケズリ	底部：糸切り→高台	黒色處理・ミガキ	
4	坪	13.3	6.0	4.5	口クロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
5	坪	14.3	6.2	4.3	口クロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
6	坪	13.6	5.6	3.7	口クロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
7	皿	11.0	4.6	1.8	口クロナデ	底部：糸切り→高台	ロクロナデ	
15号住居跡(第32図)								
1	坪	11.8	5.9	4.1	口クロナデ	底部：ヘラケズリ	黒色處理・ミガキ	
2	坪	12.2	5.6	3.6	口クロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
3	坪	13.5	4.9	4.3	口クロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
4	坪	12.6	6.0	3.7	口クロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
5	坪	14.0	7.0	3.7	口クロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
6	坪	13.4	6.6	3.9	口クロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
1号獨立柱物跡(第34図)								
1	坪	12.6	5.9	4.3	口クロナデ・ヘラケズリ	底部：糸切り→ヘラケズリ	黒色處理・ミガキ	
2	皿	14.7	7.0	3.2	口クロナデ	縫隙：剥毛がけ	ロクロナデ	施釉：刷毛かけ
3	碗	16.0	8.5	5.5	口クロナデ・ヘラケズリ	縫隙：付けかけ	ロクロナデ	施釉：付けかけ
1号土坑(第35図)								
1	坪	14.4	6.9	5.1	口クロナデ・ヘラケズリ	底部：ヘラケズリ	黒色處理・ミガキ	
1号溝跡(第35図)								
2	坪	12.7	6.6	3.7	口クロナデ	底部：圓輪ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	
2号溝跡(第36図)								
3	坪	13.0	5.9	4.3	口クロナデ・ヘラケズリ	底部：ヘラケズリ	黒色處理・ミガキ	

第6表 出土遺物観察表(6)

番号	器種	法量(cm)		外面		内面		備考
		1脚部	2脚部	高さ	器高	外面	内面	
4	环	150		4.6	4.6	ロクロナデ	黑色處理・ミガキ	
5	环	126		9.0	3.4	ロクロナデ	底部：削輪へラ切り→高台	ロクロナデ
1号窓穴(第35回)								
6	环	127		5.9	4.8	ロクロナデ	底部：糸切り	ミガキ
7	环	121		6.0	3.9	ロクロナデ・ヘラケイリ	底部：糸切り	黑色處理・ミガキ
8	环	132		6.0	4.4	ロクロナデ	底部：糸切り	黑色處理・ミガキ
9	皿	139		6.5	3.1	ロクロナデ	底部：糸切り→高台	黑色處理・ミガキ
10	鉢	20.0		22.6	9.0	ロクロナデ	底部：ナデ	ロクロナデ・カキメ
11	环	134		6.4	4.0	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ
12	环	113		5.6	3.7	ロクロナデ	底部：糸切り	墨書き「萬」
13	环	14.0		6.0	3.9	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ
2号窓穴(第35回)								
14	环	130		5.8	4.7	ロクロナデ	底部：糸切り→ヘラケイリ	黑色處理・ミガキ
15	环	129		5.6	4.5	ロクロナデ・カキメ?	底部：糸切り	黑色處理・ミガキ
16	环	128		4.6	4.3	ロクロナデ	底部：ヘラケイリ	黑色處理・ミガキ
17	环	130		6.0	4.4	ロクロナデ	底部：糸切り	黑色處理・ミガキ
18	皿	122		6.5	2.3	ロクロナデ・ミガキ	底部：削輪へラ切り→高台	黑色處理・ミガキ
19	环	137		5.6	3.6	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ
20	环	136		7.0	3.7	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ
21	环	128		7.0	3.2	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ
22	瓶	22.5	11.0	22.6	ロクロナデ・ヘラケイリ	肩部：状輪2本	自然輪付着	復元器高
通縫外(第36回)								
1	环	132		6.0	4.4	ロクロナデ	底部：糸切り	黑色處理・ミガキ
2	环			5.5	1.7	ロクロナデ	底部：削輪へラ切り	黑色處理・ミガキ
3	环	11.3		5.6	4.4	ロクロナデ	底部：糸切り	黑色處理・ミガキ

(3)区一次調査面
(3)区二次調査面
(4)区一次調査面

第7表 出土遺物観察表(7)

番号	器種	法 量(cm)	整 形・調 整・文 標			備 考
			内面	外 面	裏面	
4 壺	壺部 剥離部 底部	5.6	4.4	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？「足」？	黒色處理・ミガキ ④区一次調査面
5 壺	11.6	5.7	4.2	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？	黒色處理・ミガキ ①区一次調査面
6 壺	12.2	5.7	4.4	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？	黒色處理・ミガキ ⑥区一次調査面
7 壺	12.6	5.7	4.0	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？	黒色處理・ミガキ ⑦区一次調査面
8 壺	13.0	5.8	4.0	口クロナデ 底部：ヘラケズリ	墨書き「足」？	黒色處理・ミガキ ⑦区一次調査面
9 壺	13.9	6.4	4.0	口クロナデ 底部：ヘラケズリ	墨書き「足」？	黒色處理・ミガキ ⑨区一次調査面
10 壺	12.0	5.0	4.2	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ②区一次調査面
11 壺	13.9	9.0	3.5	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ③区一次調査面
12 壺	13.8	6.8	4.0	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑥区一次調査面
13 壺	12.1	5.4	4.1	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑦区一次調査面
14 盆	13.6	5.8	3.5	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑦区一次調査面
15 盆	13.2	5.8	3.4	口クロナデ 自然輪付着	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑦区一次調査面
16 壺	13.0	5.8	4.3	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑥区二次調査面
17 壺	15.3	6.6	5.7	口クロナデ・ヘラケズリ 底部：糸切り→ヘラケズリ	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑥区二次調査面
18 壺	11.7	5.6	3.6	口クロナデ 底部：糸切り→ヘラケズリ	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑦区二次調査面
19 壺	13.0	5.7	4.0	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑦区二次調査面
20 壺	11.7	6.0	2.7	黑色處理・ミガキ 底部：ヘラケズリ	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑦区二次調査面
21 壺	14.0	5.2	3.7	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑥区二次調査面
22 壺	12.6	6.9	3.1	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑥区二次調査面
23 壺	12.6	5.6	3.3	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑥区二次調査面
24 壺	13.0	6.8	3.7	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑦区二次調査面
25 瓶	11.6	5.8	2.1	口クロナデ 底部：糸切り	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑧区二次検出面
26 瓶	14.8	8.0	6.1	口クロナデ 底部：糸切り→高台	墨書き「足」？→高台	ロクロナデ ⑦区二次調査面
27 瓶	15.6	7.0	1.9	口クロナデ 底部：糸切り→高台	自然輪付着	ロクロナデ ⑦区二次調査面
28 瓶	13.8	7.7	4.9	口クロナデ・ヘラケズリ 底部：自然輪付着	自然輪付着	ロクロナデ ⑥区二次調査面
	21.8	23.2	9.0	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	

第4章 まとめ

今回の調査では、厚い砂質土にパックされた、保存状態の良好な遺構が調査区全体で検出された。この厚く堆積した砂質土は、仁和4年（888年）の千曲川大洪水によりもたらされた砂（以後「仁和洪水砂」とする。）と考えられており、周辺の遺跡でも普遍的に確認することができる。

洪水により運ばれた土砂は、千曲川流域一帯を覆い尽くすほど膨大なもので、今回の調査地点だけでなく、過去におこなわれた周辺の発掘調査からの検出でも判明しているように、集落などの居住域や水田などの生産域の多くを飲み込み、大きな被害を及ぼしている。

この仁和洪水砂によって被覆された遺跡は、埴科郡坂城町上五明から当市力石条里遺跡群にかけての地域一帯や、千曲川対岸の長野市石川条里遺跡、篠ノ井遺跡群などでも確認することができ、仁和4年という限定された年に起きた洪水の土砂に覆われた遺跡を調査していることによって、9世紀後半ごろの地形や環境、洪水前後の土地利用など、様々な生活の様子が明らかとなってきていることは非常に意義深い。

ここでは、検出された遺構や、5号畦畔と8号畦畔から出土した灰釉陶器を中心とする遺物群、堅穴住居跡などから出土した遺物について概観し、本調査のまとめとしたい。

1 仁和洪水直前の土地利用について

今回の調査により、仁和洪水砂を取り除いた直下の地形（一次調査面）は非常に起伏に富んでいることが判明した。

細長いトレンチ状の調査であったため壇渦の城を脱しないが、第37図に一次調査面で検出された遺構を基に作成した洪水直前の土地利用状況と、遺構面の高低差から想定した地形図を示した。

①区～③区までは比較的平坦な面が連続しているものの③区以南は地形の起伏が激しくなる。地形の高い部分には島跡や居住域とみられる空間が存在し、低い部分は大きく蛇行するような形となり、旧河道（流路）となることが考えられる。この低地となる部分には水田跡が検出されており、旧河道内を開拓し水田として土地利用していたことがうかがえる。このように、地形の高低により土地の利用状況が異なっていることから、地形の高い部分を「高地部」、地形の低くなる部分を「低地部」として、以後区別することとする。

第2章でもふれたが、千曲川で洪水が発生したのは仁和4年5月8日（888年6月20日）とされており、9世紀第4四半期、平安時代の初めごろということとなる。このころと現代とを直接比較することはできないが、6月中旬から下旬は現在の当該地周辺では田植えの時期となる。

⑦区北端では11号畦畔に直行する幅40cmほどの連續した溝状の掘り込みが検出されている。これは田起こしによる攪拌作業の痕跡と考えられ、内部には粘土塊の中に砂質土が混在する土が充満し、この攪拌により浮遊したとみられる粘土塊が、12号畦畔北側に集積している状況も確認されており、田植え直前の田起こし作業がおこなわれていた可能性が指摘できる。

他地区の水田跡では⑦区北端でみられたような田起こしの痕跡は認められないが、粘土と砂が混在した土塊が水田面を覆う状況が全域で確認されており、特に③区より南側では水田面の凹凸が著しく、いずれも表面がぬかるんでいる泥田か、それに近い状態であったことがうかがえよう。

全体図（第5図～第10図）にそれぞれの地点の標高を示したが、水田跡が検出された最南の⑧区では354.77m、最北の①区では353.97mをそれぞれ測り、直線距離約350mに対して落差は80cmとなる。この中で最も落差の大きい箇所は③区から②区の間で、③区の水田面が354.63mを測り、8号畦畔北側で34cm下がって354.29mとなる。②区1号畦畔の北側ではさらに27cm下がった354.02mと、僅か50mの間で61cm下がっていることになる。

一方、畠跡や居住域と思われる空間が広がる高地部でも、水田となる低地部と連動するよう、⑩区で356.00mであったのに対し、③区南端では355.23mと77cm下がっている。当時の地形も現地表面と同様に、北に向かって低くなっていく様相がうかがえる。

調査区全域で検出された仁和洪水砂は、下層地形の起伏に呼応するように造構面を覆う砂質土の厚さも各地点で異なっている。

砂質土の堆積厚は、低地部となる①区北端では210cm、③区8号畦畔付近では195cm、⑦区北端で180cmと、⑦区以北では概ね2m前後の堆積がみられる。全体の地形が高くなっていく南側では120cm（⑧区南端）と、洪水砂の厚さは南に行くにしたがって徐々に薄くなる。

高地部では、④-1区と⑦区12号畦畔上で60cm、⑩区南端で90cmを測るなど、地形の影響により堆積厚は薄くなり、③区の5号畦畔上では僅か30cm程度である。

地之目遺跡の東側に隣接する馬口遺跡でも仁和洪水砂に被覆された水田跡が検出されている。過去数回にわたる発掘調査では、当該調査地点のような大きな地形の高低は確認されていなかったが、平成22年度に実施された馬口遺跡の発掘調査においてグラウンド北端地点に設けたトレンチで、仁和洪水砂に覆われた地形が地之目遺跡へ向かって落ち込む部分が確認された。

トレンチは馬口遺跡と地之目遺跡の境界となる部分に、東西方向に設定されたものであるが、この落ち込みが確認された箇所が遺跡の境界（字界）付近となるのは興味深い。



第37図 土地利用と地形想定図（1：2,000）

2 畦畔状遺構について

今回の調査で畦畔として遺構名を付したものは14条であるが、この内、水田を区画する目的で人為的に構築された畦畔は8条（1号・2号・3号・4号・7号・10号・11号・13号）となる。畦畔は、水田を区画するほか、人の往来や物資を運搬する「道」としての機能も果たしており、10号・11号・13号畦畔などは、高地部と高地部とを結ぶ「土橋」的な役割も兼ね備えていると考えられる。

水田を区画する畦畔には、上幅が1m以上を測る大型畦畔、50cm前後の中型畦畔、20~30cm以下の小型畦畔の3種類があり、それぞれ役割をもち、「条里」という規則に従って構築されている。この条里について、昭和48年に長野県教育委員会が編集した『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』には、“一般に「条里」というのは、わが国古代において、水田等の耕地を中心にして行われた典型的な土地区画である。長さ六町（六五四・六米）の幅をもって東西に土地を画し、同じ六町の幅で南北を区切り、これにより碁盤目状の基本的な地割を行った。この東西に括がる六町幅の帯状の土地を「条」と呼び、これに対して南北に延びる帯状の地を「里」と称した。これらの条・里の線によって地割された方六町の正方形の土地を「里」といい、数字によって、何条何里と呼称されるのが普通であった。「里」は、さらに長さ一町毎に区切られ、一町四方の土地が三六できる。これを「坪」と称し、これも数字を冠して呼ばれ、その面積は、それぞれ一町歩となる。”と記載されている。

当該地の古代水田造営はこれを基準としてなされており、一町（=「坪」一辺約109m）をさらに南北に2分割（約54m）、東西5分割（約21m）した「半折型」の水田が、屋代遺跡群や更埴条里水田址に存在することが周知されている。

大型畦畔は、坪境を示す約109mに区画された畦畔に用いられる。広いものでは幅4m以上を測るものまで存在し、畦畔の中央部に溝状の掘り込みを並行させるものもある。中型畦畔は、主に坪内を南北約54m、東西約21mの半折型に区画する畦畔に用いられる。小型畦畔は、中型畦畔により区画された内部をさらに細かく区画する際に多用される畦畔である。

大型畦畔と中型畦畔についてはある程度規則的に構築され、水田經營には欠かせない半永久的に存続する重要な畦畔として位置付くものである。これに対し、小型畦畔は規範に則った構築がされず、位置や規模などが一定でないという特性をもっている。言い換れば、小型畦畔はその年の作付け状況に応じて作り替えを可能とする畦畔と言うことができる。

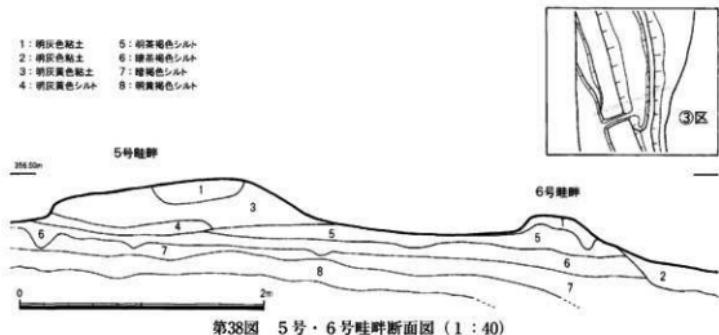
これに照らし合わせて今回検出された畦畔をみてみると、1号畦畔は上幅が110cmを測ることから大型畦畔の部類に入るものと考えられる。一方、残りの畦畔についてはすべて規模が小さいため小型畦畔の範疇として捉えることができる。

過去の調査データから、大型畦畔や中型畦畔のおおよその位置を調査前に読み取ることが可能であり、このデータに基づき調査を進める場合もある。しかしながら、今回検出された畦畔は規則的に構築されているとは言い難く、特に③区以南は起伏に富む地形に左右される形となって「条里」という水田造営ができなかった場所であったことが想像できる。

残りの畦畔6条（5号・6号・8号・9号・12号・14号）は、他の畦畔とは様相を異にするものであるが、調査を進めるにあたり便宜的に番号を付した畦畔である。

9号畦畔と12号畦畔上には崩跡となる畝状遺構、14号畦畔では溝跡などが検出されている。また、6号畦畔と8号畦畔は、先の分類に従えば小型畦畔の部類に属すが、6号畦畔は5号畦畔と並走する異様な形状を呈し、8号畦畔も湾曲するなど他の畦畔と様相を異にする。いずれも、水田を区画する

という目的で構築された畦畔とは性格的に違うもので、これら畦畔は地形変化の一つと捉え、いわゆる「畦畔」とは区別しておく。しかしながら、5号畦畔や8号畦畔を「畦畔」としない場合、そこから出土した灰釉陶器をはじめとする多くの遺物の所属遺構を明確にすることができないなくなってしまうことから、畦畔としての遺構名はそのままにし、出土した遺物については、それぞれ「5号畦畔出土遺物」「8号畦畔出土遺物」として扱うこととする。



第38図 5号・6号畦畔断面図 (1:40)

3 5号畦畔遺物出土状況

5号畦畔から2mほど東側の一段下がったところに6号畦畔が並走し、水田面から見ると雑壇状に地形が上がって行く様子がわかる。この5号畦畔と6号畦畔に挟まれた東西1m余り、南北4mほどの範囲から灰釉陶器が集中して出土している。

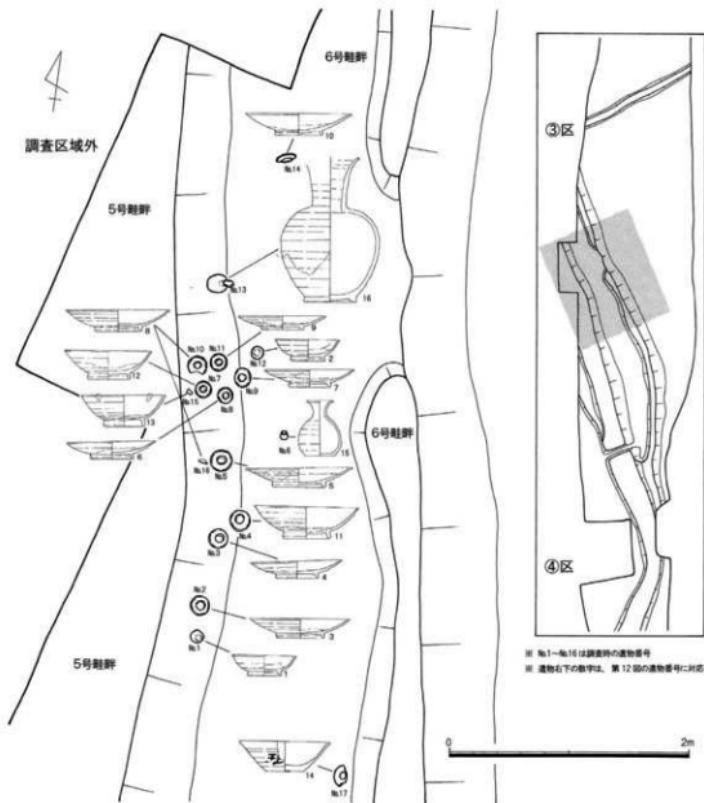
出土した皿と碗13点の内9点は底部を上にした逆位の状態で出土し、1点は底部を南に向けた縱位、もう1点は遺物集中箇所の西側を拡張した部分から破片となって出土したものである(遺物No15と接合)。正位で出土したものは2点で、いずれも小型碗である。壺2点(小型壺・長頸壺)は底部を下にして、やや斜めになった状態で出土している。

遺物は、仁和洪水砂とした砂質土に直接被覆されておらず、褐色系のシルト質土が遺物を覆っている状態であった。この褐色系シルト質土は、畠跡や⑦区から⑧区にかけて検出された居住域と思われる高地部での仁和洪水砂直下に普遍的に存在する厚さ5~10cmの堆積土であり、5号畦畔西側でも確認されている。

洪水は鉄砲水のような激流ではなかったと考えられており、流入経路は千曲川の位置や流れの方向などを考慮すると、南西方向からの流入が想定される。灰釉陶器の埋没状況及び出土状況を詳細に観察したところ、周囲に人為的な埋納行為を示す掘り込みなどは確認できなかったことから、これら灰釉陶器群は洪水によってもたらされた土砂により埋没したと判断できる。洪水の発生が田植え時期前后と想定されていることから、居住域から水田域へと地形が変化する場所において、これら灰釉陶器群を用いた祭祀がおこなわれていた可能性が指摘できる。

この他、灰釉陶器群出土地点から1m40cm南東の6号畦畔脇から土師器壊(第11図16)が、同じく南へ5mほど離れた5号畦畔と6号畦畔の間から灰釉陶器の耳皿(第11図17)と段皿(第11図18)の破片が出土している。これら遺物が洪水前に灰釉陶器群とともに同一の場所にあったかどうかについては言及できないが、土師器の壊は出土位置が近く灰釉陶器群と同様の褐色系シルト質土に覆われて

いるため、一緒にあった可能性は高いと考えられる。なお、6号畦畔下の水田面からも須恵器坏（第36図11）と灰釉陶器の短頸壺（第36図14）の破片が出土している。



第39図 5号畦畔遺物出土状況 (1:40)

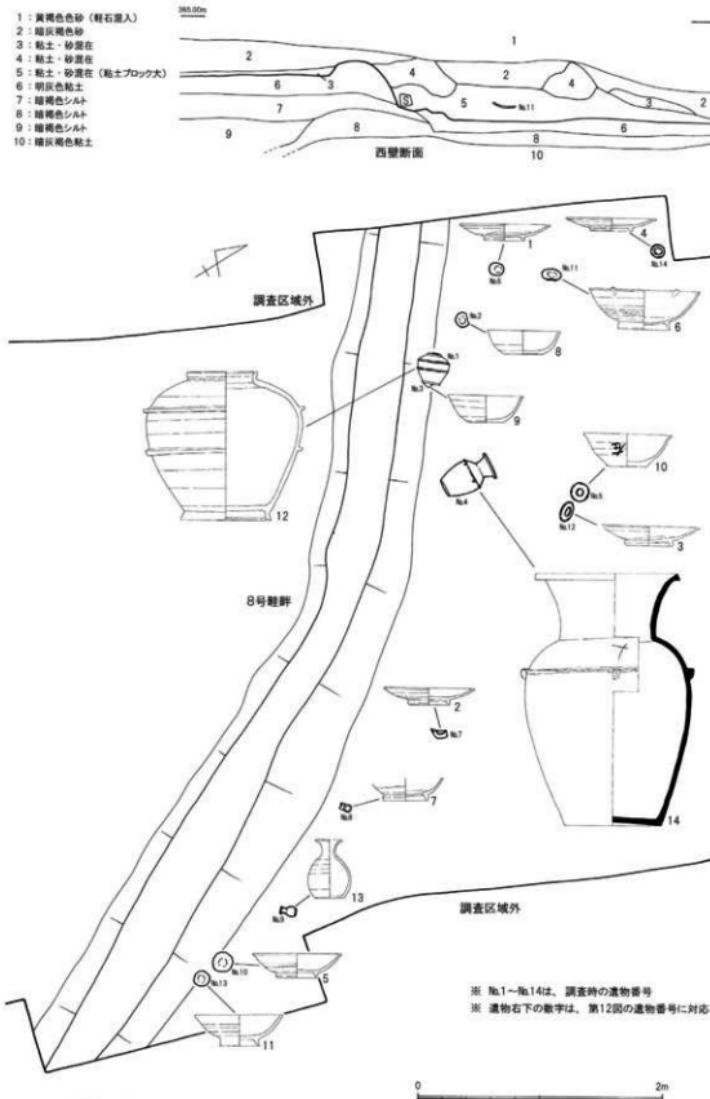
4 8号畦畔遺物出土状況

8号畦畔は水田を区画する目的で構築された畦畔とは様相が異なり、弧を描いていることもさることながら、断面形状や畦畔を挟んだ両側の水田面に大きな段差が生じている状況には違和感を覚え、他で検出された畦畔とは異質なものに思える。

14点の遺物すべてが8号畦畔北側から出土しており、大半は水田面から浮いた状態で、水田面上に堆積した粘土塊と砂質土の混合土壤に覆われている。土器は広範囲に散在し、ある程度まとまった状態で出土した5号畦畔の状況とは異なるものであるが、完形、もしくは完形に近い遺物が多いことから、これも祭祀に使用された土器群であることが想定される。

洪水が南西からの進入が推測されていることから、8号畦畔上、あるいは調査区西側の高地部に置

かれた祭祀用具が、洪水により北方へ押し流されて埋没したものと考えられる。



第40図 8号畦畔遺物出土状況及び土層断面図（1：40）

5 出土遺物について

5号畦畔と8号畦畔出土遺物の比較 調査範囲に制約があったため、双方で当時使用されていた土器がすべて出土したかどうかはわからないが、5号畦畔で16点、8号畦畔で14点と出土総数では拮抗している。

2つの畦畔から出土した土器群は、その様相から同じ9世紀後半に位置付くものであるため、同一の場所にあった可能性も考えられるが、①洪水の流入が南西方向から推測されていること。②完形となる遺物が多く、ある程度まとまった土器群の出土状況から移動距離は短いものと判断されること。③5号畦畔の遺物出土地点と8号畦畔とは20m以上離れているがこの間で全く遺物が出土していないこと。などの観点から、それぞれ別の場所にあったと考えることができ、同じような器種を使用した祭祀が、近接した場所ではほぼ同時におこなわれていたことが十分に想定できよう。

5号畦畔では16点の内10点が割れたり欠けたりする箇所が一つもない完形資料である。ほか3点は破損しているものの接合完形資料となり、残り3点は一部に欠損があるがほぼ完形になるものである。8号畦畔では14点の内6点が完形資料で、割れているが接合により完形となるものが4点ある。いずれかに欠損部をもつものは4点であるが、どれも完形に近いものである。

5号畦畔出土遺物と8号畦畔出土遺物の器種構成と数量をみると、長頸と短頸の違いはあるが壺1点ずつと、小型壺がそれぞれ1点ずつある。皿は8点に対し4点と倍の開きがある。碗はそれぞれ3点ずつあり、その内1点が輪花碗となる。小型碗は5号畦畔のみで8号畦畔からは出土していない。

土師器は、壺が5号畦畔で1点に対し8号畦畔では3点出土しているが、外面に逆位で「在」と墨書きされた土器が1点ずつ存在し、須恵器は8号畦畔のみで出土している。

皿の枚数や小型碗の有無など相違点も存在するものの、双方の畦畔出土の灰釉陶器の器種構成には一定の共通点が存在しており、同様の文字が逆位に墨書きされた土器についても何かしらの意味があるように思え、その関連性が注意される。

第8表 5号畦畔と8号畦畔の出土遺物数対比表

器種 遺構	灰釉陶器							土師器	須恵器
	長頸壺	短頸壺	小型壺	皿	碗	輪花碗	小型碗		
5号畦畔	1	0	1	8	2	1	2	1	0
8号畦畔	0	1	1	4	2	1	0	3	1

灰釉陶器はすべてハケにより釉薬を塗布されており、焼成の際の自然釉が表面に付着するものもある。いずれも光ヶ丘窯式となる。

皿は口縁部径が18.0cm~14.5cm、高台径は8.0cm~6.2cmを測り、碗（輪花碗を含む）は口縁部径18.0cm~13.8cm、高台径も8.0cm~6.2cmと、皿・碗ともに大きさの範囲は類似する。輪花碗は、5号畦畔出土のものは口縁部径13.8cmと碗の中では最も小さいものになり、逆に8号畦畔の輪花碗は口縁部径18.0cmを測る最大となるもので、対照的である。

小型碗の口縁部径は2点とも10.8cmを測り、高台径は5.3cmと5.1cmとなる。

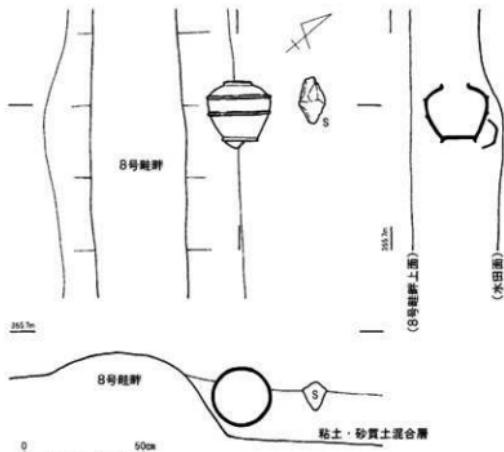
壺では、5号畦畔と8号畦畔でともにほぼ同じ大きさの小型壺が出土している。5号畦畔から出土した長頸壺は口縁部を欠損しているが、器高約25cmを測るものと思われる。

8号畦畔から出土した短頸壺は口縁部径11.7cm、胴部最大径25.8cm、高台径14.8cm、器高24.3cmを測るものである。肩部と胴部それぞれに幅5mmほどの突帯を持つことから、「突帯付短頸壺」と呼ぶことにとする。

突帯付短頸壺は完形で、口縁部を北西に向けて横倒しになった状態で出土した。粘土塊と砂質土の混在した土壤に半分以上が埋没し、上部は仁和洪水砂に覆われ、水田面からは5cmほど浮く。

内部には仁和洪水砂とみられる砂質土が僅かに流入している程度で、他に内容物はなく空洞状態であった。

壺の下部からは内面黒色処理された土師器の环が出土している。



第41図 突帯付短頸壺出土状況（1：20）

当初、その特異な出土状況から人為的埋納を想定したが、現地において調査指導いただいた信州大学理学部保柳康一教授の観察により、被覆している土壤は洪水により攪拌された粘土が砂質土とともに堆積したものと断定され、また、周囲から多くの遺物が同様の状態で出土したことから、いずれも自然埋没によるものと判断するに至った。

豊穴住居跡・掘立柱建物跡出土遺物　すべて二次調査面において検出された遺構で、8世紀中葉から仁和洪水の直前となる9世紀後半までの幅広い時期の遺構が存在している。

豊穴住居跡で最も古いものは1号住居跡で、出土遺物の様相から8世紀中葉をあてる。底部が回転ヘラ切りや、切断後にヘラケズリにより整形されている須恵器がすべてで、甕や鉢なども古相を示す。8世紀後半には13号住居跡があり、ここまでを奈良時代とした。

8世紀末～9世紀初頭では6号住居跡と12号住居跡のほか、出土遺物からは判断できなかったが、他の住居跡との重複関係から10号住居跡もこの段階となると思われる。环の割合が須恵器主体から徐々に土師器主体へと移行してくる段階で、内面の黒色処理された土師器が目立つ。

9世紀前半は2号・3号・5号・9号・14号・15号の各住居跡と、1号掘立柱建物跡がこの段階となる。出土遺物が皆無であった11号住居跡も周辺の重複関係からこの段階になるとみられる。軟質の胎土となる須恵器環が目立つようになり、灰釉陶器などもみえ始めて来る。1号掘立柱建物跡の柱穴内から出土した綠釉陶器は底部外面が中央部分で僅かに座る器形となり京都産とみられる。

9世紀後半段階は4号住居跡と8号住居跡をあてるが、出土遺物が少なく時期判断のできなかった7号住居跡と16号住居跡も、他遺構との重複関係からこの段階になるとと思われる。須恵器環の割合は減少し、内面黒色処理された土師器環が圧倒的に増加する。また灰釉陶器の出土も顕著となる。

墨書き土器 今回の調査で器面に墨書きされた土器は6点出土した。「在」が3点あるほかは「真」「足?」「風?」がそれぞれ1点ずつである。

「在」については5号畦畔と8号畦畔の出土遺物の中に1点ずつ存在していることを前項で述べたが、同じ区域（③区）から底部外面に「在」と書かれた土師器（第36図2）が1点出土している。出土地点等詳細は不明であるが、水田面直上からの出土である。

「真」は1号堅穴（第35図12）から出土したもので、墨書き土器の中で唯一須恵器に書かれたものである。胎土がやや軟質の須恵器で、横位に書かれている。

第36図の4と5は、ともに④-1区の水田面から20cmほど浮いた仁和洪水砂内から出土したものである。いずれも鮮明に書かれているものの字体がはっきりせず、第36図4は「足」もしくは「疋」、第36図5は「風」とみることができる。

なお、「風」と読める文字については、長野県埋蔵文化財センターが実施した北陸新幹線建設工事に伴う屋代遺跡群の発掘調査で、今回の調査地点に近い6区とされた調査区から「風」の刻書き土器が出土している。判読しながら字体としてはこれと同一のものとなる。

最後に

今回の調査は、約5,400m²の道路改良という大規模事業に伴うものであり、当初から複数年度による発掘調査計画を立てざるを得なかつたが、結果的に4カ年という歳月を費やすことになった。4工区に分割された各工区の発掘調査も工事発注を受けてからの調査着手となつたため、期間がある程度制約された中での発掘調査実施となった。

降雨により何度も発掘現場が水没し、排水作業を繰り返す日々や、冬期間の調査では遺構面が凍結して思うように調査が進められず、除雪と除氷排水作業の毎日など、過酷な条件の中、発掘調査に従事いただいた作業員の皆様には心より感謝申し上げる次第である。

調査遂行あたっては、鉄道線路近隣地の掘削について、しなの鉄道㈱には多大なるご理解とご協力をいただき、また、重機の手配から運用に係る一切と、調査中の安全管理面では、㈱武田組、㈱三ツ和建設、㈱堀内商会、㈲小松工務店の関係諸氏に並々ならぬご尽力を頂戴した。

発掘調査での現場指導から整理調査、報告書刊行に至るまで多くのご助言とご教示を賜わった、千曲市文化財保護審議会笠沢浩先生、信州大学理学部保柳康一教授、長野県立歴史館学芸部原明芳考古資料課長の各氏をはじめ、本調査に係わったすべての方々に御礼申し上げ、まとめとする。

引用・参考文献

川崎 保 2000 「「仁和の洪水」砂層と大月川岩屑なだれ」『長野県埋蔵文化財センター紀要8』

川崎 保 2012 「千曲川 仁和の洪水」『佐久考古通信No109』 佐久考古学会

千曲市教育委員会 2012 「屋代遺跡群 馬口遺跡8」

長野県教育委員会編 1968 「地下に発見された更埴市条里遺構の研究」

長野県埋蔵文化財センター 1997 「石川条里遺跡」

長野県埋蔵文化財センター 1998 「更埴条里遺跡・屋代遺跡群」

長野県埋蔵文化財センター 2000 「更埴条里遺跡・屋代遺跡群」 総論編

長野県埋蔵文化財センター 2011 「力石条里遺跡群」

写 真 図 版



①区 北壁土層断面（南より）



②区 一次調査面（北より）



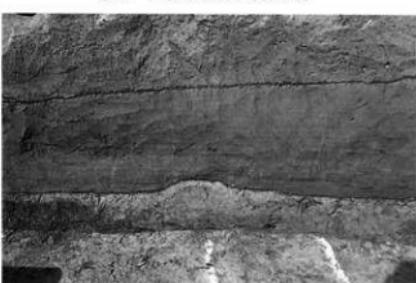
①区 3号畦畔断面（南より）



②区 1号畦畔断面（東より）



①区 一次調査面（南より）



②区 2号畦畔断面（東より）



①区 2号溝跡（東より）



②区 1号溝跡（東より）



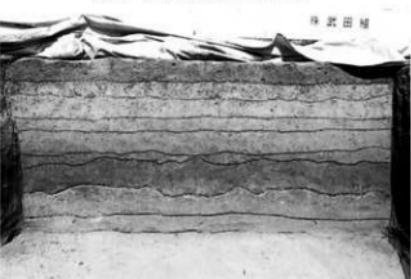
③区 5号畦畔遺物出土状況（南より）



③区 5号畦畔水口（東より）



③区 5号畦畔遺物出土状況（北東より）



③区 5号畦畔拡張部土層断面（東より）



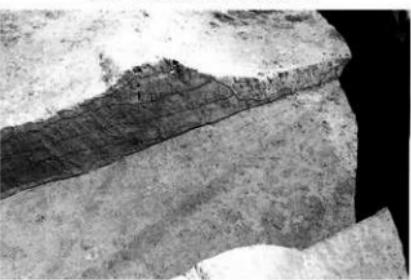
③区 5号畦畔遺物出土状況（東より）



③区 5号畦畔断面（南東より）



③区 5号・6号畦畔検出状況（南より）



③区 6号畦畔断面（南より）



③区 突帶付短頸壺検出作業（北より）



③区 8号埴輪検出状況（北西より）



③区 突帶付短頸壺出土状況（北より）



③区 8号埴輪断面（東より）



③区 突帶付短頸壺出土状況（東より）



③区 8号埴輪断面（西より）



③区 8号埴輪遺物出土状況（北東より）



③区 1号住居跡（南より）



③区 1号住居跡カマド検出状況（南より）



⑤区 12号・13号住居跡（南西より）



④-1区 遺構検出状況（南より）



⑤区 14号住居跡（西より）



④-2区 遺構検出状況（北より）



⑤区 二次調査面（北より）



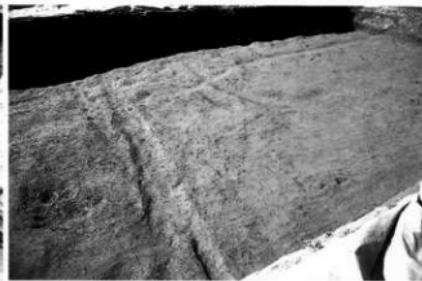
⑤区 縱状遺構検出状況（南より）



⑤区 二次調査面（南より）



⑦区 11号畦畔検出状況（北より）



⑧区 3号～6号溝跡（南東より）



⑦区 12号畦畔畠状遺構（北東より）



⑧区 台状遺構（西より）



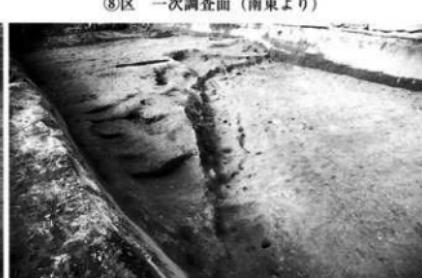
⑦区 遺構検出状況（南より）



⑧区 一次調査面（南東より）



⑦区 遺構検出状況（南より）



⑧区 9号溝跡（南西より）



⑨区北 一次調査面（南より）



⑨区北 土層断面（西より）



⑨区南 一次調査面（北東より）



⑨区南 二次調査面堅穴住居跡（西より）



⑨区北 二次調査面堅穴住居跡（南より）



⑩区 突状遺構（東より）



⑩区北 6号住居跡カマド検出状況（西より）



⑩区 土層断面（北より）

5号畦畔



第11图1



第11图8



第11图2



第11图9



第11图10



第11图3



第11图11



第11图4



第11图12



第11图5



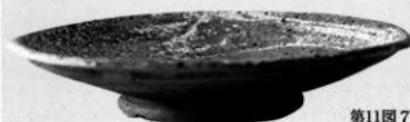
第11图13



第11图6



第11图14



第11图7



第11图15



第12图5



第11图16



第12图6



第12图8



第12图9



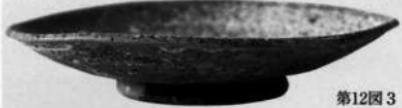
第12图1



第12图2



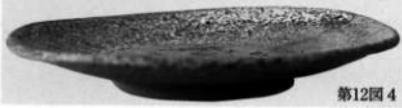
第12图10



第12图3



第12图11



第12图4

8号畦畔



第12图12

1号住居跡



第15图 2



第15图 3



第12图13



第12图14



第15图10

4号住居跡



第20图 2

5号住居跡



第21图 4

6号住居跡



第22图 6

PL.10

6号住居跡



第22図3

15号住居跡



第32図3

8号住居跡



第23図3



第32図4

13号住居跡



第28図1

1号掘立柱建物跡



第35図2

1号竪穴



第35図9



第28図2

14号住居跡



第30図4



第35図12

15号住居跡



第32図1



遺構外



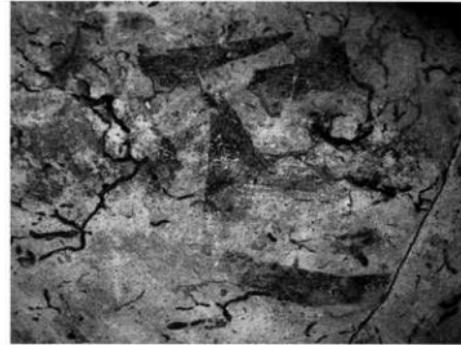
第36図 1



第36図 2



第36図 5



第20図11

第36図29

第36図30

第36図31

4号住居跡

遺構外

報告書抄録

ふりがな	やしろいせきぐん じのめいせき2・こみちいせき2							
書名	屋代遺跡群 地之目遺跡2・古道遺跡2							
副書名	市道屋代新田線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	寺島孝典							
編集機関	千曲市教育委員会生涯学習文化課文化財係							
所在地	〒389-0892 長野県千曲市大字戸倉2388番地 TEL 026-275-0004							
発行年月日	2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やしろいせきぐん 屋代遺跡群 地之目遺跡	長野県千曲市大 字屋代1008番地 6ほか	20218	31-2	36° 32° 39°	138° 07° 53°	20090225 → 20110512	3,080m ²	道路改良
やしろいせきぐん 屋代遺跡群 古道遺跡	長野県千曲市大 字屋代775番地5 ほか		31-8	36° 32° 33°	138° 07° 53°		60m ²	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
屋代遺跡群 地之目遺跡	水田跡 畠跡 集落跡	奈良時代 平安時代	水田跡 畠跡 堅穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝跡 堅穴遺構 台状遺構	1面 8条 1面 14棟 1棟 1基 10基 2基 1基	土器 灰釉陶器 綠釉陶器 土製品	平安時代の水田跡 や畠跡のほか集落跡を検出。 水田跡から灰釉陶器など多くの遺物 が出土し、祭祀に使用されたものと思 われる。		
屋代遺跡群 古道遺跡	畠跡 集落跡	平安時代	畠跡 堅穴住居跡	1面 2棟	土器 灰釉陶器			

千曲市埋蔵文化財発掘調査報告書

- 2004年 更埴条里水田址 七ツ石地点
- 2005年 屋代遺跡群 荒井遺跡5
更埴条里水田址 七ツ石地点2・栗佐遺跡群 宮裏遺跡II
- 2006年 東條遺跡
屋代遺跡群 大境遺跡8
平成15・16年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
- 2007年 屋代遺跡群 城ノ内遺跡8
栗佐遺跡群 五輪堂遺跡8
更埴条里水田址 油田地点
屋代遺跡群 大境遺跡9
平成17年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
- 八幡遺跡群 大道遺跡
千曲市内古墳範囲確認調査報告書
町裏遺跡
- 2008年 屋代遺跡群 城ノ内遺跡10・荒井遺跡6
平成18年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
栗佐遺跡群 南沖遺跡4
- 2009年 平成19年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
- 2010年 平成20年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
- 2011年 平成21年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
- 2012年 屋代遺跡群 荒井遺跡7
屋代遺跡群 馬口遺跡8

屋代遺跡群
地之目遺跡 2
古道遺跡 2

発行日 平成24年3月30日
発行 千曲市教育委員会
〒389-0892 長野県千曲市大字戸倉2388番地
電話 026-275-0004
印刷 信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野県長野市西和田一丁目30番3号
電話 026-243-2105
